

## 第50回九州地区大学一般教育研究協議会議事録

<https://doi.org/10.15017/20602>

---

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 50, 2002-09-05. 九州地区大学一般教育研究会  
バージョン：  
権利関係：



## 医科大学における物理教育

佐賀医科大学一般教育物理 末崎 幸生

### 1. はじめに

第 50 回九州地区大学一般教育研究協議会へは、佐賀医科大学は加盟していないが、偶々当番校が佐賀大学であり、表記題目で発表参加をさせて戴いたので、ここに報告する。発表参加をさせて戴く機会を与えてくださり、当番校としてお世話下さった先生方に感謝してはじめの挨拶とする。佐賀医科大学開校から24年目となるが、その創立以来の回顧、総括および反省などについて述べる。一般教育教科を教師の視点から捉えると、言うまでもなく自分自身の後継者となる学科の学生ではなく教師の専門とは異なる分野へ進む学生への教育である。このとき、教師の採るべき態度や教授法には多くの立場や原理があり、それぞれの教師が信じる方法や教授法を用いて最善の教育を試みられていると思う。私自身の医科大学における教授法については、物理担当1人と実験実習担当の教務員1人だけという限られたスタッフで行わざると得ないという教育環境で、やれる最大限のことを遂行してきたという自負を持っている。スタッフの少なさは佐賀大学の諸先輩や同僚達の非常勤講師による応援によっても支えられてきたことも述べておかなければならない。

### 2. 佐賀医科大学一般教育物理の内容

#### 2.1 教育スタッフ

##### 専任スタッフ

末崎 幸生	教授
一ノ瀬浩幸	教務員

##### 協力スタッフ

竹生政資	情報科学教授
------	--------

##### 非常勤講師

平良豊	佐賀大学理工学部教授
-----	------------

陣容は以上のように少ないスタッフで教育を行っている。

参考までに他の自然科学のスタッフは数学1人、情報科学1人、化学2人、生物2人であり、物理は相対的に少ないと言える。

#### 2.2 教科内容

科目	学年	時期	単位数	担当者
医学科				
物理学第一	1年次	前後期1こま	(4単位)	末崎
		内容;力学、流体、波、熱、電気		
物理実験	1年次	後期1こま	(1単位)	末崎、竹生、平良、一ノ瀬
物理学第2	2年次	前期1こま	(2単位、選択)	末崎
		電磁気、生物物理学(筋肉収縮、タンパク質の物性 生体膜の物理)		

## 看護学科

基礎物理 1年次 前期1こま (2単位) 竹生、平良  
力学、熱学、電磁気学

以上のように専任教員だけでは教科教育をできないので、物理のバックグラウンドを持っておられる竹生教授に情報科学担当として赴任してもらい、物理教育を補完してもらっている。さらに、佐賀大学理工学部の平良豊教授に実験指導と看護学科の基礎物理の半分を担当してもらっている。

### 2.3 教育の理念と実際

2.3.1 モットーモットーとしては物理学科ではなく医学部の教養および基礎科学の教育という観点から、使える物理、日常生活に密着した物理を教えることを心がけている。これを実践するには、講師自身が物理を活かすような生活をおくっていないと空疎な抽象的な教育になる。教材は教育専用のものばかりでは生活との関連は薄れる。

具体的には例えば、自動車は初等物理学の応用問題の塊であるが、筆者は古い車に乗って興味を持ってそのメカニズムを学び、いろんなトラブルを自分自身で解決することを実践している。昨今、特に日本人の生活は贅沢になり、物理の先生といえども新しい車に乗り換えているが、これでは活きた教材にはならない。全ての現象や機材に興味を持つのは自然科学者の基本である。したがって、筆者の車に対する授業での例題は非現実的で抽象的なものではない。

さらに医学を志す学生が相手であるから、思考錯誤の末テキストは「医歯系の物理学」赤野他、東京教学社、を採用している。大学テキストについてついでに言えば、誤りが多すぎる。受験にからむ高校までのテキストの完全さに比べると雲泥の差がある。追求しない我々にも問題があるが、誤りを指摘しても改訂版を真面目に出してくれないという大学教育のいい加減さがここにも現れている。さらにテキストの章末の演習問題が非常に非現実的な例題が多い。これでは物理に対する信頼が薄れる恐れがある。特に具体的な数値を与えて計算させる問題などに非現実的な値を勝手に選んでいる、または現実的な数値について無知や無関心があるとしか考えられないような例題がある。

### 2.3.2 出席、出勤、レポート、休講

#### 出席

少し、教育の実際に立ち入ってみる。出席は毎回名前を呼んで取る、肉声で呼びかけることは心理的に親近感を生じて効果があり、学生の信頼を得る。出席を義務づけることは退屈させないぞという講師の意気込みを示すものである。サボっても自学自習で勉強すればよいという講師の態度は、無機質なテキスト以上の生の講義をする気概を欠いたものであると言わざるを得ない。

#### レポート提出

おざなりのレポート提出は、よほどフォローしなければコピーが蔓延るばかりである。レポートの評価は実験以外は大きくしない。

#### 出勤

出勤は週1回の非常勤を除いて毎日している。したがって、学生の質問のためのオフィスアワーは研究室を開放して随時受け付けている。

#### 休講

休講は原則としてしない。小さい大学であり、学会出張などがあれば他の教員と交代などで埋めあわせる。いくら、立派なカリキュラムを作っても、休講を頻発して教育内容を目減りさせては無意味である。

## 学生の受け止め方

学生からは物理はかなり厳しいと思われるようである。本来、医学を目指している近視眼的な学生は何で今更物理かという感覚である者もいるが、真面目な学生はそれなりに良く学んでいる。医学的な話題を取り入れるなどの努力はしている。

テストの最後に感想や要望を書く問いを設けて学生の声を聞くことにしているが、成績評価前には必ずしも厳しいコメントにならないので生の声を聞く努力が必要である。

### 2.3.2 評価

如何に魅力ある講義や演示をするかという苦労話が多いが、逆に言うとそこに関心が過度に集中していると感じる。しかし、私の学生時代のある講義で、講義自体はうまかったが最後に1回だけテストがあったのみで、出席を採られた訳でもなく何でどう評価されたのか分からない後味の悪さを感じた経験がある。私の教科目の評価については、私自身が若いときに感じた不信感だけは学生に与えたくないという思いでやっている。具体的には通年の講義であれば、少なくとも3回の試験を行ってマンネリ化を防止する。おざなりのレポート提出は、よほどフォローしなければコピーが蔓延るばかりである。さらに次の講義でテストの講評をして、解答例を掲示し採点した答案を全員に返却するのである。さらに評価を決定する前に集計ミスや採点ミスに対する疑問や訂正に対処する時間を設ける。これは時間と労力を要するが、これをやらないで流暢で名講義というだけでは招待講演と大差はなく、教育の義務ははまだ半分しか果たされていない。公平で出来るだけ公開された評価を示して、初めて教科目に対する信頼を得ると考えて実行している。これには評価の透明性の故に生じる欠点も悩みもある。思い切った新しい問題や課題を課すると反発も多く、冒険がしにくいのも一つである。独創を旨とする研究活動ではなく、確かな科学の伝承を主目的として、最大公約数的教育効果を考えれば許されるかと考えている。

カリキュラム改善や改組など、お上の目に見える表面上の改革は盛んだが、教育に王道なし、原点に返ることが求められていると考えている。

## 3 研究と教育

### 3.1 研究の教育における意義

研究は教育活動と矛盾するものではない。度を過ぎた教育軽視による教育のサボりは問題であるが、研究活動は教師の教育に向かう自負と自信を支える原動力であり、学生にとっては尊敬と信頼を与える基本そのものである。高校教師と大学の教師が違うまたは違わなければならないのは正にこの点である。実際、学会発表などで外国出張するという余談をすると、学生は非常に興味を持って聞く。学生は単位認定者として学生に君臨する教師が、学外でまたは自然科学者であれば国際的にどの程度通用する人かということに関して興味と関心を持っているのである。このことは難解な講義をするということとは無縁のことである。

### 3.2 研究内容

筆者の目下の研究内容は生体膜およびそのモデル系の統計力学的理論である。内容は従来のメジャーな物理から離れるので、全ての物理の内容をスキャンする一般教育の物理を手抜きしないで教えることは、直接研究に資するところが大きい。研究内容を説明する代わりにこれまで投稿してきた論文雑誌を以下に挙げて、その内容を推定してもらうこととする。

Phys. Lett.  
 J. Phys. Soc. Japan  
 J. Peptide Protein Res.  
 J. Colloid Interface Sci.  
 Biochim. Biophys. Acta  
 J. Dispersion Sci. Tech.  
 Biophys. Chem.  
 Chem. Phys. Lipid  
 Chem. Phys. of Lipids  
 J. Anesthesia  
 J. Phys. I France  
 Langmuir  
 Information

Prog. Theor. Phys.  
 Biopolymers  
 J. Theor. Biol.  
 Proc. Natl. Acad. Sci.  
 Physiol. Chem. Phys.  
 Eur. J. Biochem.  
 J. Solution Chem.  
 Colloids Surfaces  
 Phase Transitions  
 Membrane  
 Thin Solid Films  
 Progress in Anesthetic Mechanism

### 3.3 学会

所属学会は日本物理学会、日本生物物理学会、日本化学会コロイド分科、膜学会である。研究とはご承知のとおり論文として研究成果を発表するだけでなく、学会などで発表して成果を宣伝しなければなかなか伝わらないものである。私はそうゆう意味で国外で開かれる国際学会には13回出席発表して、研究成果を積極的にアピールしてきた。

平成12年には佐賀医科大学において、筆者の主催によって小規模ながら国際シンポジウムを開催した。以下にその要綱を示す。

#### 国際シンポジウム「両親媒性分子系コロイドの物理」

##### “Physical Aspects of Amphiphilic Colloids”

テーマ International Workshop on Physics of Amphiphilic Systems

日時 平成12年11月11日-12日

場所 佐賀医科大学看護学科大講義室

世話人代表 末崎幸生 佐賀医大

世話人

森河良太 東京薬科大

川勝年洋 名大工

好村滋行 都立大

今井正幸 東大

山本潤 筑波研究コンソ

瀬戸秀紀 広島大

滝沢登 佐賀大化学

主な外国人招待者

G. Porte

University of Montpellier II, France

M. Laradji

University of Prince Edward Island, Canada

C.Y. Mou

National Taiwan University, Taiwan

G.J. Fleer

Wageningen Agricultural University, Netherlands

A.G. Petrov

ISSP, Bulgarian Academy of Science, Bulgaria

詳細は一般教育物理の HP、

[http://www.ged.saga-med.ac.jp/suezaki/paac2000/Report\\_on\\_paac.html](http://www.ged.saga-med.ac.jp/suezaki/paac2000/Report_on_paac.html)

または本学ホームページの佐賀医科大学の学際的活動

<http://www.saga-med.ac.jp/academic/>

テーマを絞った比較的少人数(外国人 10 人、日本人40人)のシンポジウムであったが、ゆったりとしたスケジュールで、討論の時間を充分取ったので緊密な議論が活発に行われ、参加者からは大変感謝されて主催した甲斐があった。下の写真は参加者全員の記念写真である。



#### 参考文献

末崎幸生、 教養部奴隷開放論, 日本物理学会誌 42, #7 (1987) 603-605.

末崎幸生、 物理教育評価について, 大学の物理教育 2001年3月号 p62-63.

## フィールドワークを取り入れた授業を目指して

佐賀大学 佐藤三郎

### 1. はじめに

学生に対し興味を沸かせる授業を提供することは、我々教官の使命である。与えられた科目名と世の中の動き、学生の興味、他に開講されている科目等を見ながら自分の取るべき方法を考察してみた。その結果、下記の5点に絞って授業を組み立てることにした。

- (1) 題性のあるテーマを選定すること。
- (2) 興味深い教材(テキスト、AV、新聞の切抜きなど)を積極的に導入すること。
- (3) スポット的に非常勤講師をお願いし、学生の目先を新鮮にすること。
- (4) フィールドワーク(工場見学など)を取り入れ、実体験を踏むこと。
- (5) 話し方・間の取り方など工夫をすること。

ここでは、環境問題を電気工学の立場から考えるため、原子力発電所を取り上げる。原発の賛否については、毎日のようにテレビや新聞などで取り上げられており話題性には事欠かない。むしろ、おびただしい情報量の中で自分達の必要な情報は何か？ 果たしてどこに問題があるのか？ 学生達と一緒にこれらの問題を考えることにした。

なお、テーマの取り上げ方や授業の進め方などに対し、諸兄のご批評を賜れば幸いである。

### 2. 授業の組み立て

#### 2-1. テーマの選定

私が、授業に原発を取り上げようと考えたのは平成10年に遡る。日本学術会議エネルギー・資源工学研究連絡委員会主催の九州地区座談会(座長：原雅則九大教授)に、電力工学を専攻する若手研究者佐賀大学代表として参加する機会があった。その席で私は、『21世紀の電力技術戦略を考えたとき、国民の原発への理解以上に反発が先行している現状を苦慮し、我々の議論が少な過ぎること』を訴えた。これを打開するためには、大学の授業等で原発を大きく取り上げ活発な議論をすることが重要であると考えた。

そのため、平成11年前期及び平成13年前期の2度にわたり原発の安全性を取り扱った授業を企画した。授業の名前は「環境と電気工学との関わり」とし、さらに具体性を持たせるため副題として「巨大システムの安全性を検証する」を付けた。この授業では以下の点を強調した。

- (1) 地球を取り巻く環境問題と原発との関わりにおいて、CO<sub>2</sub>の発生を抑制する一方法として原子力発電に着目する。
- (2) 原発の原理について学び、その抱える問題点について考察する。
- (3) 特別講演を企画し、電力会社や国の考え方を聞く。特別講演の講師として、九州電力(株)佐賀支店広報担当課長とエネルギー資源庁原子力安全担当課長補佐をお招きした。
- (4) 土曜日を1日使い、佐賀県玄海町にある玄海原子力発電所を見学した。
- (5) 原発以外に飛行機や医療の事故例について学び、共通点を整理した。
- (6) フリー討論会を行ない、学生の意見を聞いた。

さらに授業では、NHKスペシャルや日高義樹のワシントンレポートなどのドキュメンタリーを録画したビデオ、及び新聞の切抜きなども大いに活用した。

#### 2-2. 授業計画

下記に平成13年度前期の具体的な授業計画について示す。

- 4/10 : 授業ガイダンス；教官の自己紹介、授業計画など
- 4/17 : 地球を取り巻く環境問題
- 4/24 : 原子力発電所の原理とその役割
- 5/8 : 核燃料サイクルとは？
- 5/15 : 電力会社の状況（特別講演 九州電力(株)佐賀支店広報担当課長）
- 5/22 : 安全検査の現状（特別講演 エネルギー資源庁原子力安全担当課長補佐）
- 5/29 : 核廃棄物処理とウラン燃料について
- 6/9(土) (6/5振替) : 玄海原子力発電所見学（参加費無料、8:30集合、16:30解散）
- 6/12 : フリー討論
- 6/19 : 原子力発電所の事故例に学ぶ（チェルノブイリ、スリーマイル島、JCO）
- 6/26 : 取り巻く国際状況（オイル危機、テロリスト、核開発競争、平和利用）
- 7/3 : 安全とは何か（航空機事故に学ぶ）
- 7/10 : 安全とは何か（医療事故に学ぶ）
- 9/11 : フリー討論（原子力発電所はホントに安全か）
- 9/18 : 定期試験（ノート、資料持込可能）

### 3. 上手な話し方・間の取り方

飽きの来ない講義を行なうため、時間配分を以下のように計画した。

- 10分：出席取り（人数が70名と多いので2回目以降は中止、講義時間を長くした。）
- 30分：講義前半；本日の話題Ⅰ（資料および板書）
- 10分：余談；メーカーの話、自己体験談
- 30分：講義後半；本日の話題Ⅱ（AV利用）
- 10分：理解度テスト（出席取り代わり）

#### 3-1. 余談の例：メーカーで出世するための哲学（佐藤流出世学）

- (1) 会社を選ぶ：OB・同窓会からの情報など
- (2) 主流を選ぶ：先輩と仲良しになり職場を知る、同期生；最初は仲間、次は敵
- (3) アピール性：声大きい、いつも発言、目立つこと。
- (4) ごますり性：上司に対しタイムリーに知識・意見を提示する。  
上司に歩調を合わせる、かゆい所に手の届く存在になれ。
- (5) 物分りの良い上司は危険：使える上司はわがまま、部下をこき使うものだ。

#### 3-2. 理解度テストの例（九電担当課長の講演：5月15日実施）

環境と電気工学との関わりー巨大システムの安全性を検証するー理解度テスト（5）

（出欠表兼質問表）

学籍番号 \_\_\_\_\_。

氏 名 \_\_\_\_\_。

- (1) 本日の講演のキーワードは何だったか。各自思うものを5つ挙げなさい。
- (2) 講演を通して、諸君らが九州電力に対し、原子力および原子力発電所の安全性について質問あるいは意見があれば、できる限り簡潔に箇条書きでまとめなさい。

#### 3-3. 回答例 I

九州電力(株)への意見をまとめると下記となった。(平成13年6月9日まとめ)

- (1) 棄物はどのようにして回収し何処に保管するのですか。漏れる事は? (重複数: 3)
- (2) 廃棄物の完全な処理は出来ていますか。最終処分は埋めるだけで良いか?
- (3) 核廃棄物の処理がうまく行かない、再処理も出来ない場合がありますか。
- (4) 放射性廃棄物を将来無くす事はできませんか。
- (5) 日本の廃棄物処理場が稼働していないのに原発の操業を続けて良いのですか。
- (6) このまま高レベル放射性廃棄物を発生させて良いのですか。
- (7) 冷却用に使われた水はどのように処理するのですか。
- (8) 地震にはどれくらい耐えられるのですか。(2)
- (9) 原発内で火災が起きた時どのように対処するのですか。
- (10) タービン以外の発電方法はないのですか。
- (11) 放射線の影響を受けない食物はできますか。
- (12) 九州の中で福岡の被曝放射線量が一番多いのはなぜですか。
- (13) なぜ人は放射線を浴びると死んだり白血病になるのですか。
- (14) 原発で働いている人の被曝が少ないのはどうして?
- (15) 被曝した時の対処方法は何か。
- (16) 原子力発電所で最悪な状況というのはどのような状況でしょうか。
- (17) 原子力の廃熱を利用して温度差発電はできますか。
- (18) 発電所の建物の強度から、何年運転可能ですか。
- (19) 第5の障壁が壊れるほどの爆発が起きる事はありますか。
- (20) ヨーロッパが脱原発に向かっている理由は何?日本はこのままで良いか (3)
- (21) 西欧の原発も日本とシステムで、同じ位安全ですか。
- (22) なぜ日本はエネルギー自給率をフランスのように上げられないのですか。
- (23) 玄海原発を作る時反対した人をどのように説得したのですか。
- (24) 玄海原発で今まで問題が起きた事はありますか。事故の原因の第1位は何? (4)
- (25) 定期検査ほどのくらいの周期で行なっていますか。
- (26) 玄海原発は後何年運転できますか。
- (27) 蒸気発生器の細管が壊れると2次冷却水と混ざりませんか。
- (28) 格納容器の内側の壁はどのように修理するのですか。
- (29) 原子炉内の掃除をする時被曝の心配はありませんか。
- (30) 九州で原発の予定は今後ありますか。原発の後は?
- (31) ECCS (非常用炉心冷却装置) の動作途中で空だきになる可能性は有りませんか。
- (32) 使用済燃料は何%再利用できますか。
- (33) ウランはプルトニウムになりそれからどうなるのですか。
- (34) 核融合はどこまで進んでいますか。他の新エネルギー開発はどうなっていますか。
- (35) 石油、石炭、天然ガスを使いきり無くなったらどうなりますか。
- (36) こんなに安全に気を使っているのになぜ事故は起きるのですか。(2)
- (37) 原発を制御しているのは人間ですが、人間による事故はどのように防止?
- (38) 発電所で不安はありませんか。環境に対しても安全だと言えますか。
- (39) 万が一事故が起きた場合迅速に対応できますか。体制はありますか。
- (40) メルトダウンが起きたらどのような被害になりますか。
- (41) 事故が起きた時どの辺りまで影響が出ますか。起きない対策は? (3)
- (42) 事故が起きた時復旧にどのくらいかかりますか。

- (43) 原子力発電所を解体する時も安全ですか。
- (44) 原発のデメリットはなんですか。
- (45) どうして原子力を発電にしようと思ったのですか。
- (46) 日本の発電事業が原子力だけに依存することはありませんか。
- (47) 国民に信頼される安全対策を取っていますか。

### 3-4. 回答例 II

エネ庁原子力安全担当課長補佐への意見をまとめると下記となった。(6月9日まとめ)

- (1) 新エネルギーの時代はいつ頃から来ますか。
- (2) 新エネルギーは発電量で原発に対抗できる時がきますか。(2)
- (3) こんなに厳しい検査があるのになぜ事故は起きるのですか。(3)
- (4) 事故後に規制が強化されますが、その改定はもっと速くできませんか。
- (5) 1回の定期検査はどれくらいの期間がかかりますか。費用は？
- (6) 定期検査も人間が実施するのだから憶測や手抜きが起きると思いますが、対策は？
- (7) 検査の際、人間の感覚が多く使われていますが機械化はできないのですか。
- (8) 安全検査において違反が見つかった時、どんな罰則が有りますか。(2)
- (9) 検査や点検を行なう人は何らかの資格が必要ですか。
- (10) 原発には厳しい規制ありますが、現場ではどの様に運用されていますか。
- (11) 原発が大地震にみまわれたらどうなりますか。被害はどの程度になりますか。
- (12) 海外における原発の事故例について紹介して欲しい。
- (13) なぜフランスは積極的に原発を進めているのでしょうか。
- (14) 今後のエネルギー構成について、コストより資源の有無の方が大切では？
- (15) 原発を解体するとき安全性は確保されていますか。
- (16) 原発は今後増えて行くのでしょうか。
- (17) 原発は危ないと言われますが、どの程度危ないか？その対策は？
- (18) どんな安全対策をしても結局は人為的な事故が起きます。対策は？
- (19) 原発が日本に必要な事は分りましたが、なぜ住民の理解が低いのでしょうか。
- (20) 主務大臣への申告制度は有効に働くのでしょうか。
- (21) 緊急時の対応として具体的にどのような事をやっているのですか。
- (22) JCOの事故後、政府は原発を無くそうと考えなかったのですか。
- (23) 個人的な質問：なぜこの仕事につこうと思ったのですか。
- (24) 同じく、どのような道を辿ってこの仕事に就かれたのですか。

## 4. 授業を終えて

### 4-1. アンケート

授業終了後アンケートを実施した。(9月11日実施、回収率51/61)

- (1) 良かった点：①ビデオを見た。②見学に行った。③専門家の話を聞いた。④ビデオ、見学、講演と多岐に渡り印象深い。⑤原発や環境問題に自分の考えが持てた。⑥原発の建て屋内部まで見学できた。
- (2) 悪かった点：①部屋が狭くて暑い。②フリー討論にならない。③板書をもっとして。④ビデオを最後まで見たい/ビデオの時間が長すぎる。
- (3) 意見：①余談が良かった。②出席簿の回覧にミスがあった。③質問しにくいのでレポートにして欲しい。④ビデオの音量、話しの声量を大きく。⑤原発に賛成/反対両者

の意見を聞きたい。⑥新エネルギーの話題が聞きたかった。

#### 4-2. 定期試験 (9月18日実施)

最後の授業時間に定期試験を実施した。なお、試験問題(1)については、出題を予告をし、予習を課した。

- (1) 環境保全および原子力政策について、日、米、英、仏、独、露、中国の考え方や立場をまとめなさい。(60点)
- (2) 下記から2つ選んで、用語の説明をしなさい。(40点)
  - (a) 原子力発電の原理
  - (b) 核燃料サイクル
  - (c) 核廃棄物処理
  - (d) 原子力発電所の事故例
  - (e) 航空機の事故例と事故対策
  - (f) 医療の事故例と信頼回復方策

#### 5. まとめ

授業の中では、学生に対して原発の見学すなわちフィールドワークが最もインパクトがあった。玄海原発は数千人の従業員・作業者を抱える大工場だ。現地見学で学生達の目にまず飛び込んできたものは、広大な緑の公園とその中にそびえ立つ30年の風格を備えた玄海原発、どこにも異論を挟ませ得ない厳しさだった。新聞やTVが余りにも現実と離れ、人目を引くため批判が先行していることが良く分る。現場で働く人たちの様子を観察しただけで、どこに不安全性が隠されているのかははっきりしない。

そこでもう一度教室に戻り、昔の事故例を参考にしながらフリー討論を行った。これによって、自分達が勉強したいこと、学ばねばならないことなどがはっきりしてきた。

とにかく、『百聞は一見にしかず』である。

最後に、授業の反省点をまとめると以下となる。

- (1) フィールドワーク(工場見学)は多いに役に立った。
- (2) 見学に土曜日を利用するのは疑問が残る。
- (3) 見学のスポンサー(バス、弁当)として九電(株)に依頼したが、疑問の残る可能性がある。
- (4) 講師は、九電課長、エネ庁課長補佐以外に原発反対意見の方も呼ぶ必要がある。
- (5) フリー討論では、活発な意見交換ができるようさらなる工夫が必要である。
- (6) 最後に、教官の意見を押し付けないよう心掛けたが、アンケートやフリー討論では教官と良く似た意見が多かった。今回の授業は、学生の自由な意思決定に悪影響は決して無かったと期待する。

### 出席者の推移

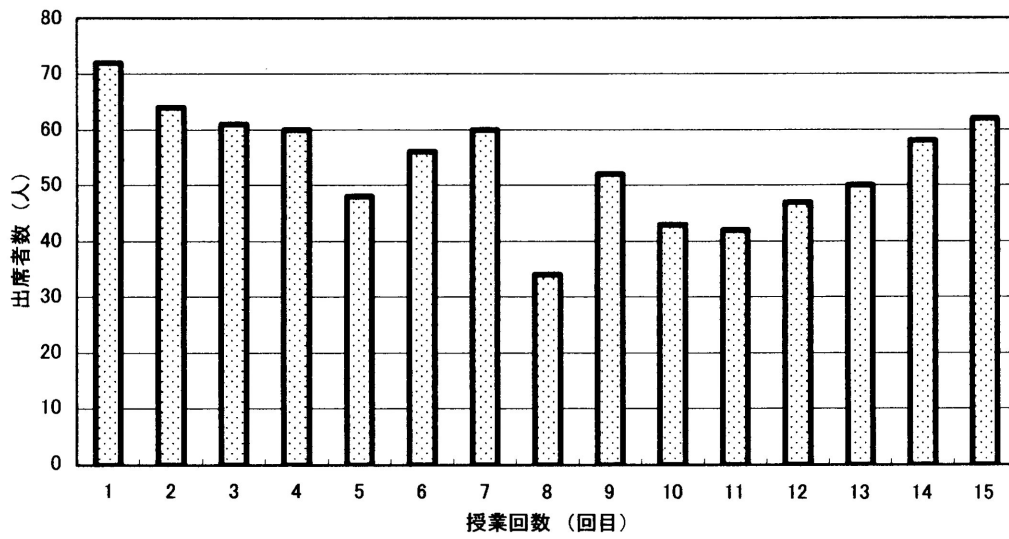


図 1. 出席者の推移

5回目は出席の取り方に不備があった。8回目は玄海原発見学である。

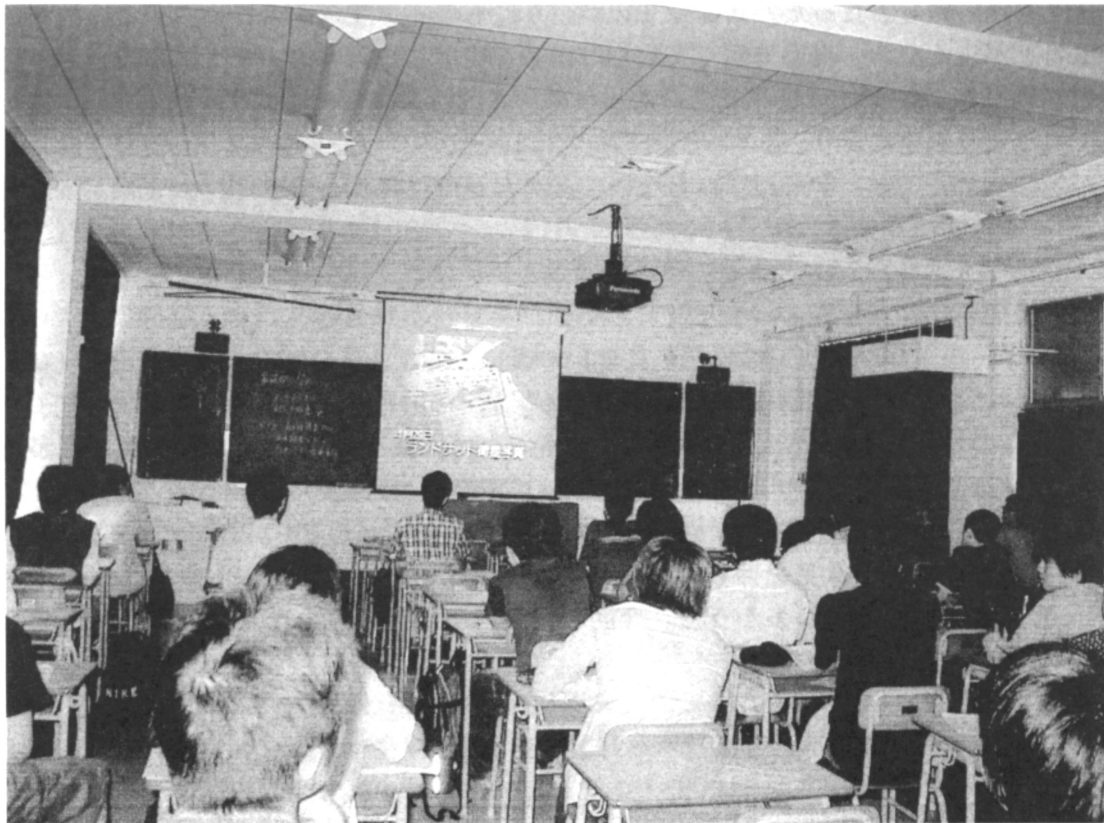


図 2. 授業の風景

ビデオ (NHKスペシャル) 上映中。

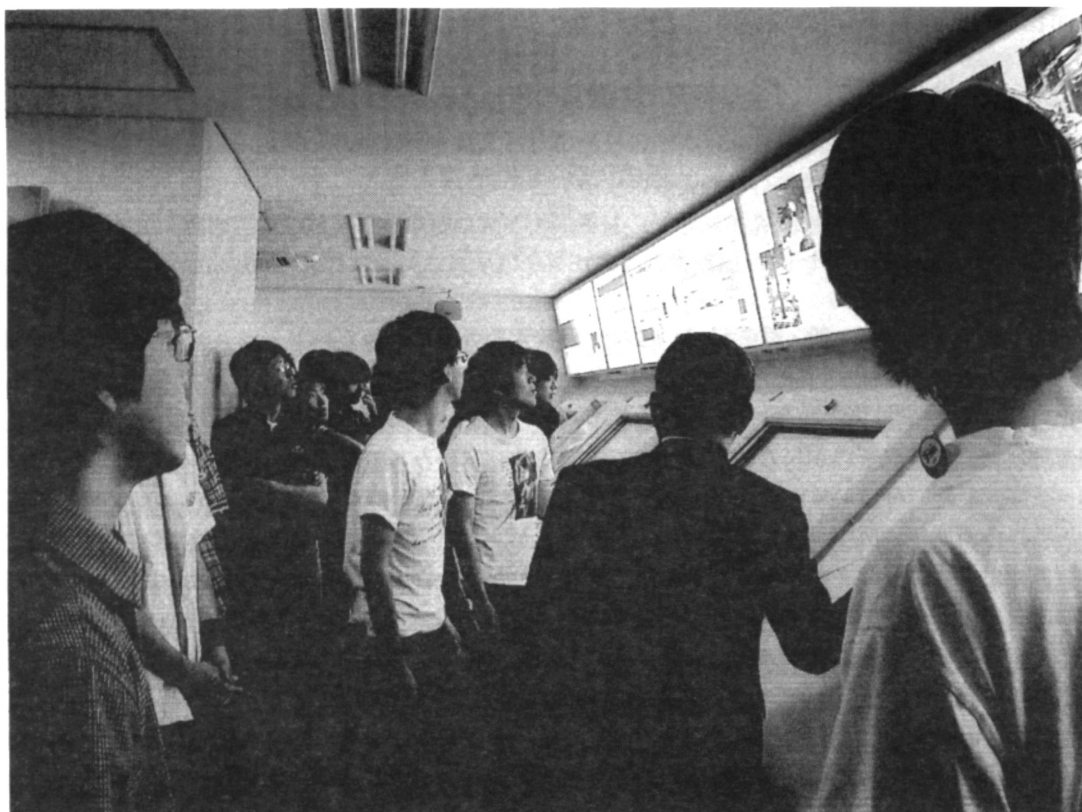


図 3. 玄海原子力発電所の見学風景  
見学ルームから、鉛ガラスを通して使用済み核燃料貯蔵水槽を覗く。

## 「全学教育での教官の思わくと学生の期待」

佐賀大学 和佐野 喜久生

本大学の全学教育（一般・教養科目）は、1）教養教育科目として、フレッシュマンセミナーと主題科目（6主題分野： 1. 文化と芸術、2. 思想と歴史、3. 現代社会の構造、4. 人間環境と健康、5. 数理と自然、6. 科学技術と生産）、2）共通基礎教育として、外国語科目、健康・スポーツ科目および情報処理科目、のそれぞれがあります。ここでは教養教育科目としての主題科目についての個人的意見を述べます。ただ、今はいずれの大学でもその存亡を賭けた大学改革の行動計画に忙殺されている時期でしょうから、九州地区でいろいろ事情が異なる大学が、共通研究課題として一般教育論を論議することの意義には多少の疑問を感じます。理由は、それぞれが個性と魅力ある大学へ変革しようとして競争しているときに、他を追従しても生き残ることはできないでしょうから。今は、国民の声に耳を傾け、地域に根ざした地域色豊かで国際的な教育・研究レベルと魅力ある大学の構築を目指して、他に先んじて行動に移すときでしょう。今から考えるのでは、消滅あるのみでしょうか。

今回の一般教育研究会の自然科学部会のスピーカーに、農学部からいきなり選出され、十分な時間をかけた準備ができず間に合わせの話になりますが、これまでの自分の過去を振り返りながら、自戒の念と反省を込めた自分の思いを述べることにします。話題での「教官の思わく」と「学生の期待」とは、教官はどのような意図をもった考えで教養教育をしているのか（かたく言えば、どのような教育理念・哲学があるのか）、それに反して、学生は何を期待し、その期待感は充足されているのか、両者の思いに齟齬はないのか、というような漠然とした疑問からの思いつきです。

まずは話の端緒を探すつもりで、昨年度の発表会の講演要旨からキーワードを拾ってみました。2つの要旨から、獲得した知識・能力の社会還元、人材の養成、人間としての独立、人格形成、知的能力の開発、自らの問題意識、創造的な思考力、独創的な問題解決、などの魅力的なキーワードが見つかりました。これこそが教養教育に込められた「教官の思わく」の表現か、それとも、教官が抱くはかない幻想なのか、余りにも欲張り過ぎでしょう。ともかく、いずれも大学の将来計画や学長訓話などに頻出する響きの良い言葉ですが、具体的にどうすればよいのか、どのような事例・経験談があるのか、ほとんど聞いたことがありません。

例えば、人格形成・創造的思考・独創的解決など、だれでも口にすることは容易ですが、われわれ教官にどれほどの人格があって、自らの日頃の生活・行い・考えがどれほど創造的か、また、自らの研究・教育がどれほど独創的か、自信をもって肯定できる人がいるでしょうか。もしも、そのような教官がいるとすれば、大きな声で諭すまでもなく、教官の背中を見ながら学生自ずから習得することを期待し、教官は黙々と実践しているのではないのでしょうか。

私も1人のスピーカーとして研究会へ何らかの問題提起・提言をすべきかと思いますが、教養教育のあり方について何らかの名案、1つの正しい解答があるはずはありません。もともと、教育に1つの固定した価値基準や方法論を求めるべきではなく、常に教官個人・集団あるいは各大学それぞれが自由な発想と創意工夫によって、より内容豊かな魅力的な教育・講義になるように努力すればよいことでしょう。その目標達成のため一方策としては、大学の教育・研究のすべてを情報公開することだろうと思います。第三者の意見を傾聴することこそ、正しい発展的な解決の道を見いだすチャンスがあるはずで、百人・2百人の学生には得々と自説を講演しておきながら、それ以外の人には一瞥だにさせない、というような理屈はないでしょう。授業参観・評価はあるのが当然で、研究成果も、パテント問題がなければ、市民一般に遠慮せず公開・PR したらいいでしょう。市民・地域住民の力強い支持があつてこ

そ大学存続の可能性も生まれてくるのではないのでしょうか。以上は、研究会の講演要旨（部分的に訂正）として提出したものです。

次には、「学生の期待」について考えてみましょう。以下に示しましたアンケートの結果は、研究会の参考資料にするため、私の講義「農耕起源を考える」の当日の出席者80数人に、全学教育全般に対する感想を書いてもらったものです。結果は、プラスとマイナス評価に分けて列記しましたが、両者の割合はプラス評価が7割ほどでした。列記事項はマイナス評価（プラス的评价も含まれる）が多くなっていますが、プラス評価には似たような単純な意見が多く（人数は省略）、マイナス評価に真剣な多くの記述がみられたからです。

#### 全学教育全般に対する感想、アンケートの結果（2001, 7, 3）

##### プラス評価と希望

- 1) スライドの授業は楽しい、ビデオも使ってほしい。
- 2) いまのシステムでよいが、分かり易くしてもらいたい。
- 3) 希望の科目がとれないので、人気のある科目を増やしてほしい。
- 4) 他の分野が勉強できて面白いが、もっと分かり易くしてほしい。内容は簡単すぎないようにしてもらいたい。特に、物理は基礎を要求されるとつらい。
- 5) 専門的なことは、専門の先生が理解しやすい。
- 6) いろんな分野のことを勉強できるのは楽しいが、分かるように授業してほしい。
- 7) 面白いときも、つまらないときもあるが、全学の先生は横柄ではない。
- 8) 異分野の講義をきく機会があったがよい。1, 2年で、主題科目、語学を学ぶのが良い。
- 9) 先生の情熱が伝わってくると、難しい講義でも、理解しようと自然に真剣になってしまう。
- 10) テストがないと、自分が理解できる部分を自分なりに深めていくことができる。
- 11) 全学教育は、いろんな知識を得ることができる大切なものと思うが、自分が興味のもてるような授業がよい。
- 12) 専門は、一般的なことと同時に、深く入ることも必要である。
- 13) 主題科目はあってもいいが、教室の移動が大変である。
- 14) 授業中のレポートだけでなく、宿題レポートがあれば、きついけど、さらに勉強もすると思う（尻を叩かれて動く方です）。

##### マイナス評価と希望

- 1) 国公立大学も法人化されるようだから、各大学は特色ある教育が求められている。佐賀大学はとてもきびしい状況にたたされているわけで、もっと全学教育も特色ある教育、高度な教育が求められる。また、一般教養科目の充実も必要であり、もっと英語の充実をお願いしたい。
- 2) 主題は不要である。他学部の講義はほとんど意味不明で、仕方なく受けているが、時間の無駄である。専門の言葉が多く、とても難しい。分かり易い授業か、自分で考えられることは各自で考えるような授業がいいと思う。
- 3) 主題科目で、選んだ分野から大半を取らなければならないのはおかしい。分野選択させるのは止めてほしい。主題の登録分野の制度が複雑で分かり難いので、廃止してほしい。
- 4) 経済学部の学生ですが、理系（5, 6主題分野）を受講できる機会がもっとあった方がよい。
- 5) 語学は申し分ないが、主題科目の講義はだらけている。
- 6) 専門過ぎるものがある。正直言うと、ついていけない部分が多い。
- 7) 分からなくなると、やる気がなくなる。
- 8) 興味がもてない。テーマを考え直してほしい。
- 9) 異分野は面白いが、テストをするのはがまんできない。レポート提出で、出席重視でよい。
- 10) 1年生のとき全く受講できず、留年しそうになった。

- 1 1) 先生が1人で話している講義は面白くない。人数が多すぎるからだろう。人数が少ないと楽しく、先生と親近感をもてて頑張ろうという気になる。
- 1 2) もっと授業を増やして、少人数制にしてもらいたい。主題科目をもう少し変える必要があると思う。
- 1 3) 全学は非常勤の先生が多く質問し難い。学部の先生は教室に居られるので質問ができる。
- 1 4) 主題科目は1、2年で終わるべきで、いまの形は止めてほしい。1年ですべてを終わって、2年からは専門にってもらいたい。単位の取り方は、学部と同様にしてほしい。
- 1 5) スライドを多くして、プリントも多めに刷るようにしてほしい。
- 1 6) 自分がとりたい講義が3年にならないと取れないのは何かおかしい。
- 1 7) もっと講義の種類を増やしてほしい。それができなければ、教養部を復活させてほしい。
- 1 8) 学部の講義で「こんなことも習っていないのか、そうか、今は教養部がないからな」と云われて、基礎的な講義になってしまい、専門が進まない。
- 1 9) 卒業単位数を減らして、一つのことを多く勉強できるようにしてもらいたい。卒業単位数に主題は不要である。
- 2 0) 生徒のことを考えて、興味ある講義を自由に取れるようにしてほしい。受けたくない講義を受けるのは時間の無駄で、何のための大学かわかりません。お金を取るためですか。
- 2 1) 野外調査など、実体験できる教養科目を増やしてほしい。校外に出る課外授業や、実験を踏まえた授業にしてほしい。
- 2 2) 討論形式などを取り入れれば、積極性が高まり興味も広がるだろう。
- 2 3) 教室は、全学教育用(学部内ではなく)を使用してもらいたい。
- 2 4) シラバスと違った内容の授業がある。理工系の科目に多いことですが、シラバスには文系の学生にも分かり易いとしておきながら、講義内容は専門のことばかりで、徐々に興味も薄れていきます。
- 2 5) 授業形態を欧米のように、質問をするやり方がいいと云われても、小さい頃からの教育でそれが出来なくなっている。「質問しましょう」と云うのはタブーになっているのではないのでしょうか。本気でやる気なら、欧米風に本格的にやるしかないと思う。
- 2 6) 受付の態度がよくない。いやいやそうである(複数意見)。
- 2 7) クーラーをつけてもらいたい(多数意見)。勉強は苦勞してするものだ、という古い考えに縛られている。

#### 外国語

- 1) テストの難易度が違いすぎる。レベルの高い方に合わせてもらいたい。
- 2) 英語Bをもっと受けられるようにしてもらいたい。
- 3) 教科書の難易度が違いすぎる。高度なレベルに統一してもらいたい。

#### アンケートのまとめと結果に対する感想

- 1) 全体的にはプラス評価が多く、異分野の専門に対する知識欲・興味・関心度はかなり強いものがあるようです。しかし、専門用語の説明不足などで講義内容を理解できないでいる学生もかなりいるようです。教官側の努力・準備不足もあるようです。
- 2) 教養教育を強く拒絶する学生も何人かいますが、それを学生の不真面目さのせいにするのではなく、そのような考えが何に由来するのかを真摯に検討すべきと思います。
- 3) 多くの学生の教養教育に対する期待度は高く大きいものがあるようです。面白く興味あるテーマについて、レベルを落とさないで分かり易く話してもらいたいと云う学生の希望は、正しくそれがすべてと言う感じがします。
- 4) 先生と討論したり、現地に行ったり、実験をしたり、宿題レポート書いたり、などで充実感のある時間帯にしたい、と言う希望がありますが、これに応える智恵はないのでしょうか。また、先生は情熱的

であってほしいとも云っていますが、これも面白い意見かとも思います。

5) クラスを少人数にして、学生が興味をもつテーマの講義を増やして欲しい、面白くないものを無理に聞かされるのは我慢できない、と云うような強い願望・悲鳴は教養科目が必須科目だからでしょう。学生に個性や創造性を求めるならば、受講を強制する必須科目について、その存在意義を根本的に考え直す時期がきているのではないのでしょうか。

6) 単位の取り方を分かり易くして1, 2年で単位取得を完了させ、科目選択は自由にして欲しい、と言う考えはこれまでの大学の方針と全く対立するものですが、学生の要望の方が現実的のように思われます。現実にはいろいろな矛盾を抱え込んでいる理想論的なルールは廃止した方がいいのではないのでしょうか。

以上のように、学生諸君は意外と真剣に感想を書いてくれましたが、それは教養科目が必須科目だからでしょう。また、主題科目の講義の話題・トピックスの内容をみると、ほとんどが自分の限られた専門分野になっているようですので、同じ学部の学生をクラスから排除する理由はないと思います。なお、主題分野のテーマは大きなものが設定されていますが、学生が聞く一教官の話題はその小さな断片にし過ぎない訳で、一般教養科目と言えるかどうかは疑問です。

#### 各論としての自分の場合

以上は汎論でしたので、各論として自分のことについてお話しします。

私の講義は、第6主題分野(科学技術と生産)の個別授業(各自のテーマで話す)ですが、多くは共通テーマで小グループをつくるコア授業の形態をとっております。「農耕起源を考える」が科目名ですが、テキストは共著「講座・文明と環境、第3巻 農耕と文明」(朝倉書店、3, 800円)を使用しましたが、本代が高すぎて学生はほとんどが購入しないようです(今回は話題毎に詳しい要約プリントを配布しましたので)。スタート時は、自分の専門を中心とした農耕起源を話しましたが、話題が専門に偏り過ぎた感じがしましたので、テキストを使用することにしました。実際には、1「総論 農耕と文明、1-22、梅原猛」、2「気候と森の変動、24-40、安田喜憲」、3「大型動物の絶滅と人類、77-90、石弘之」、4「農耕の起源と環境、116-126、安田喜憲」、5「西アジア型農耕文化の誕生、127-142、常木晃」、6「稲作の江南起源説、143-167、和佐野喜久生」、7「新大陸を目指すモンゴロイドの移動、56-76、田島和雄」に代わる生物・人類進化概論(今回は省略)で、テキストの7割ほどになります。テキストの話題が広範で最初

は苦勞もありましたが、学生の印象は、農業の話だけかと思っていたら、このようにいろいろな話が聞けるとは意外であったということでした。授業の最後の15分は毎回、感想文を書かせて出席と理解度をチェックしますが、今回は大学での講義が最終回になりましたので、最後に書かせた感想文を紹介します。最終成績は、120人中の81人が合格(32人がA判定、4回以上の欠席は不合格)でした。感想文(B4用紙1枚)は記名させていますので、お世辞もあるでしょうが、文末の2, 3行から原文のままを列記しました。

1) 授業内容がけっこう専門的で、先生が通説とは違う意見だったので、そこをもうちょっと分かり易く説明してくれたらありがたかったと思います。地図を使っての説明は分かり易くて良かったと思いました。

2) 農耕起源を考えるということは、想像力を膨らませるものだと思った。歴史や起源についての研究は、それが確実に証明されると興味が薄れていくが、まだ、明らかにされていないことについていろいろ考えることは楽しそうなことだと思った。

3) 普段関わりない「農耕起源」の分野を知ることができて、とても満足しています。・・実際には3つの伝播ルート説が存在し、そのルート説の1つ1つが、ある根拠をもっており、どれが事実かどうか自分の中でとても気になります。

4) この講義を受けて、農耕という私たちの生活に欠かせない食料を生み出す事の起源を学ぶことがで

きて本当に良かったと思います。ありがとうございました。

5) 授業の途中で難しく理解しづらいこともありましたが、授業を受けたことで、大まかな農耕についての歴史が分かり、学習することができたので良かったなと思いました。

6) 農耕社会の誕生は本当にスゴイ事だと思う。専門的な話になると少し難しかったが、スライドで見たりするすることで理解の整理ができて良かったと思う。次回からは、もう少し少人数で、もっと内容の濃いものにすることができればと思います。毎回のレポートも内容の整理に役立ちました。

7) 作物の野生種や起源種を学んだりすることはとても面白く、今後、大事な分野になっていくかも知れない。そういうことを知ることで、とても勉強になった。おかげで、農学に対する視野を広げることが出来たと云うことでも、この講義を受けてよかった。

8) この講義では1つの学問のあり方を学んだ。数少ない事実の点と点を結びつけ、そこから、人の考え方によって様々な仮説が生まれてくる。もちろん、農耕やその他の様々な大昔からの人々の生活のあり方も興味深かったが、私には先生の仮説を中心とした人々の考え方の違いの方が興味深かった。“考える”と名づけられている意味が理解できた。

9) どの辺が先生の専門に入り過ぎたの分からないが(注：私が講義中に、今回は最後の講義ということで、意図的に自分の専門的な話をいつもより多くしたことを反省した)、大陸に近く、日本稲作の発祥の地といわれる佐賀や九州との係わりについて、もっと知りたかった気がする。

10) 先生を見ていて、1つのことに何年もかけて取り組んでいることがすごいと思いましたし、うらやましくも思いました。自分が今、何をしたいかが分からない状態であることもあって、1つのことを今でも熱心に研究されているのがすごいと思いました。

11) この講義は、あつというまででした。このような講義をするならば、もっと時間を費やしてほしいと思います。

12) 正直な話、稲の起源自体に魅力は感じなかったが、講義を聴いていて、少しだが、やる気が出てきた。ただだ大学生活を送っていた自分がはずかしくなった。ありがとうございました。

13) 6分野の講義は先端技術についての講義が多かったので、意外だが、面白かった。伝播ルートなど、どのような道をたどり稲作技術やイネが日本に伝わったかなどについては、文教で歴史が好きなので特に興味をもてた。

14) 日本人は米(稲作)の歴史をもっと深く識り、稲作の偉大さと重要性、その価値を改めて認識する必要があると、この授業を受けて思った。

15) 住む、生きるために文明が造られると言われた時は、そうなのか、なぜいままで気付かなかったのだろうと驚きがあった。自分にとって専門外であるからこそ、たくさんの発見と驚きを得ることができたと思う。環境についても考えさせられた。とても興味を持てた講義だと思う。

16) 今日の授業を受けて、とても興味があった。もっとたくさん、この授業を受けたいと思った。初めは興味がなかったが、先生の授業が少しずつ興味をもてるようになった。また、授業を受けたいです。

17) 先生の講義は、タンタン(淡々)と先生が話すため、多少の眠気は誘われるものの、その内容は、私にとっては新しく、新鮮なものでした。火曜日、1限目、朝早くから毎週ありがとうございました。

18) 少し、先生の話は専門的ではあったけれども、それはそれとして、面白く聴講できた。レジメも適切でとても読み易かった。自分自身の専門とは全く違う分野でしたが、新しいものに触れることができました。

19) この授業のようなものも、自分の知ることができないことを知る、というすばらしい学問だと思えます。僕も先日、テレビで弥生時代のことをやっていたのを思わず見てしまいました。知ることのできない過去を知るという人間の一つの欲求をぜひとも先生の手でかなえてほしいと思います。

20) ・・高校までは教科書に述べられていることは全て正しいと信じ、何の疑いもなく暗記してきました。・・様々な根拠を示された上で覆されてしまうと、これらの農耕に関することごとくだけではなく、そ

の他の全ての分野に対しても疑わしく思えます。「大学は高校までとは違い、自分から学問を探究していく場所である」と以前に言われましたが、今回、このことを具体的・実践的に理解できたように思えます。

2 1) プリントだけではあまり集中できなかった。講義中にレポートを書かせるのではなく、2, 3回ぐらいは宿題のようなレポートをさせてもよかったと思う。

2 2) ・・私はその通りだと思う。いろいろな人々の起源説は様々であるが、もっと時間をかけて、真実を見つけて、本当の稲作起源を発見してほしい。

2 3) 日本の稲作起源の伝播ルートが確定されていないことに驚いた。・・このような農学の謎を、和佐野先生のような農学者に解いてもらいたい。これからもいろいろな研究がんばってください。とてもわかりやすい講義ありがとうございました。

2 4) この講義は集中講義などで聞いたかったです。・・一週間たつと忘れてしまってる事が多くて、もう少し聞いたかったです。

2 5) 自分も日本人の中の米の大ファンとして、稲作が伝わったことに感謝したい。

2 6) 本や教科書・テレビなどであっていることは正しいという先入観で見えていた。しかし、今では、その内容をうのみせず、自分で判断し、考える楽しみが分かった。

2 7) 学会という世界の中で、新しい説をいうのは大変なことだろうと思えた。世の中、新しいことを始める時は、何かしら障害があると思う。そして、それを乗り越えるためには、自分の仕事に情熱を持つことだと、今日の講義を聞いて思った。情熱を持てるような仕事を見つけたいと思った。

2 8) この講義を受けて、歴史とは奥が深いと感じた。・・専門家たちもその時代を生きていたわけではないので、絶対的な正解はないのである。・・これだから、わからないことを調べることは実に面白いことで、それにとりつかれてしまった人間はやめられなくなってしまうのである。

2 9) 一度定説となった起源説を覆した和佐野先生はすごいと思った。しかも、否定できるだけの十分な資料を備えていたのには感心しました。・・これらを学んだことはとても良かった。農耕起源には、まだ多くの謎があるが、1つ1つ和佐野先生が解明して欲しいと思いました。

3 0) 中国のいろいろな地名や有名な出来事が出てきたので、少しうれしかったです。この講義をとったから農業方面の仕事につきたいとは思いますが、日頃食べているお米がどのように作られたかが少しわかることができました。・・知らなかったので、いろいろ知ることができてよかったと思います。

いささか紹介が長くなりましたが、読み直しているうちに、それなりに私の思いを感じてくれたのかと感慨も覚えながら多くを列記してしまいました。激励してくれたことに素直に感謝しながら、学生の期待に少しでも応えるべく頑張らなくちゃ、と改めて気合いを入れております。ともかくも、上記のキーワードの幾つかには応えることができたかな、という感じもします。

#### 今、大学は何を考え何をなすべき時か

最後に、冒頭に問題提起しました「今は、一般教養教育についての末節的な技術論を論ずるときではなく、本筋の大学改革・革新に向けて行動する時である」について少し述べたいと思います。

9月30日の毎日新聞の「教育の森」続・大学再編欄に「見えない理念・将来像」と大きな見出しが付いて、「佐賀大学と佐賀医科大学との統合（他の選択肢が消えて8月に決意した、と説明）には理念と将来像がない」「理念より、まず統合ありき」「議論の内容や情報が公開されていない、と教授陣」「九州の大学が教員養成系学部を再編・ブロック化する計画が水面下で検討されている」などと報道されました。

今はPRの時代で、いずこの大学も校費を削って紙面広告している時に、何とも情けない記事です。読者は、広告記事はちらし感覚で流し読みしますが、取材記事は事実の報告として真剣に熟読します。大学当局は、なぜ、常から話しているはずの大学の将来計画や教育理念を、心行くまで述べなかったのでしょうか。現実、記事の通りなののでしょうか。その後、大学から記事に対する反論も出ないよう

ですから、ともすれば何もなかったのではと、今でも半信半疑です。大学の管理体制は強化（2人の副学長をもつ）され、外部の有識者を入れた運営諮問委員会もすでに数回はあったはず。委員会からは、大学の将来に対する提言は何もなかったのでしょうか。

現代はハードよりソフトの時代、だれもが百も承知していることです。特に日本のような人件費の高い先進国では、一般消費財の製造業での国際競争力は急激に低下しています。当然、大学の存在価値・意義も、このような社会の急激な構造的変化に迅速に対応し、如何にして有用・適切な提言を出せるかにあるでしょう。ある日本の自動車メーカーと商社が、強力な社長のリーダーシップによって生き返った例があります。成功の秘訣は、多くの人による果てしない民主的（消耗的）論議によるボトムアップ方式ではなく、確固たる信念と哲学をもったリーダーによる大胆な方向転換とそれに応える個々の自己革新努力にあったようです。リーダーシップの発揮は強制ではなく、労働者が働いている現場で、率直でオープンな討論と説得によるトップダウン方式の実践でした。大学では、上級の会議は寡黙で革新的なフリートキングはほとんどなく、下級の会議は饒舌過ぎてものごとはすぐには決まりません。東大教授がテレビで、一般の会社では数分で決まるようなことが、大学では全員が数日かかって論議しても決まらないのですから、とぼやいていました。

一般教養教育の改善、大学改革のいずれにしても、当然あるべき理念・哲学・将来像とそのため具体的な目標が提示され、それらについて十分に構成メンバーが理解していることが必要条件でしょう。新聞に、理念と将来像がないと書かれるようでは、これから一般国民・市民・地域住民に大学の存在理由を訴え、国立地方大学存続の必要性を説得していくのは至難の業でしょう。研究についても、その成果がマスメディアを通して世間一般に公開されると、研究者の哲学の有無・内容がすべて暴露されます。つまり、行政側か住民・被害者側か、いずれの立場で研究してきたかがよく分かります。組織内では、論文数や研究費の獲得件数・額などの単純な統計数値が評価の対象になりますが、外部からは研究の本質的価値を一瞬にして見抜いてしまいます。特に、テレビの画面ではすべてが表現されますので、物事の本質が見え過ぎて怖いほどです。水俣病・エイズ・ダイオキシン・狂牛病、身近には有明海の汚染問題、など多くの重大な社会的問題を私たちの世代は抱えてきましたが、どの大学のどの教官がその本質的解決に取り組んできたか、これらの実績にこそ、存続すべき大学への国民の厳しい審判が待っているのではないのでしょうか。

#### 大学改革の一端としての教養教育問題

本論について、少し個人的な具体的提案をしたいと思います。もし、大学（大学教育）の存在意義が上記しましたキーワード、人間としての独立、人格形成、知的能力の開発、自らの問題意識、創造的な思考力、独創的な問題解決力、などに要約されるとすれば（本大学の学則には、豊かな人間性と国際的人材の育成がある）、それを実現させるための最善の大学運営、組織・体制、カリキュラム、人的配置（人事）、などを考えなければならないでしょう。特に、学生に個性・創造性・独創性を期待するのであれば、思い切った学則などの規制緩和が必要になるでしょう。必須科目の廃止や、学部・学科の壁を低くし、学生の選択の幅・自由度を思い切って広げることでしょう。自由やムダ、反骨心、現状への不満・反抗心があってこそ、その中から何か独創的・創造的なものが誕生する可能性も期待できるでしょう。ベンチャー企業を起こして成功している学生が、教養科目の単位不足で留年しているなどは、まさしく国益にも反することでしょう。

大学での単位修得についても、卒業総単位数（現状よりも多くする）と大筋の修学指針を示し、後は、教官個人・グループの要望科目リストやその関連情報などを教官個々のホームページを通して誘導すればいいでしょう。また、学科・学系などで履修科目を強制するのではなく、学生・受験生個々の将来（どのような仕事・研究をしたいかという希望）に必要な情報を、教官個々の責任で提供していく時代ではないのでしょうか。教官個人あるいは研究分野にアクセスのないものは、自ずから消えていくこともやむを得ないのではないのでしょうか。このことは、高校生・一般社会人による大学・大学院の選抜基準をも、

有名ブランドとしての大学名から優秀な教官のいる大学に変えさせることにあります。優秀な教官をスカウトしたり、あるいは育てる環境づくりは、大学の意欲と努力さえあれば不可能ではないでしょう。社会からの評価も、国立大学の卒業生としてではなく、だれだれ教官の教え子として、確実な信用と保証書付きの学生として個人的有名ブランドが与えられることになるでしょう。そのためには、教官に対する正当で公平・透明性のある総合評価が必要になるでしょう。競争の前に、だれもが納得できる評価基準が必要でしょう。

最近、日本が変わったと感じさせられることに、小泉首相の出現があるでしょう。自分の一貫した信念・哲学を国民に直接訴え、国民の圧倒的支持によって改革を進めています。話も官僚の作文ではなく、自分の言葉で率直に分かり易く、威圧的でもありません。考えがあるのならば、ルールを敷く前に、リーダーはメンバーが十分に納得するまで繰り返し率直に話すべきでしょう。

## 一般教育での地球（環境）科学実験

佐賀大学 半田 駿

### 1. 授業の概要・実施要領

発表者は、約7年前から環境に重点を置いた地球科学実験の授業を実施している。ここでは授業の概要について、本年実施内容を基にして報告する。

授業は、長時間屋外で行うので集中講義の形態をとる。8月の最初の週は例年晴天が続くので、本年（2001年）も7月31日～8月3日の4日間を選んだ。参加人数は、設備の関係から3班、5人程度（約15人）としている。集中講義であるので、募集は5月に行った。応募者数は約40人（1年生6人、2年生11人、3年生以上23人）で、そのうち抽選で15人を選んだ（1年生は全員無条件受講許可）。内訳は1年生6人、2年生5人、3年生以上4人、学部では文化教育学部4人、経済3人、理工5人、農学部3人と全学部にわたる。しかし、実際に参加したのは、1年生4人、2年生4人、3年生以上1人であった。3年生以上の欠席率が高いのが目に付く。実験のため欠席されると班分け等に支障をきたすが、今のところこれを防ぐ有効な手段は見あたらない。

実験は、

- 1、大気汚染の原因の1つであるNO<sub>x</sub>の測定、
- 2、水質汚濁：水温、電気伝導度（EC）、pH、溶存酸素量（DO）、パックテストを用いたCOD、NH<sub>4</sub>、NO<sub>3</sub>-Nの測定、透視度（自作）の測定

の2テーマである。以下に本年のスケジュールを紹介する。

#### 第1日午前

授業内容を説明し、日本環境学会編集委員会編「環境科学への扉」（有斐閣）を教科書として、大気汚染、水質汚染の基礎知識を実験内容と関連させて説明する。各班4～5名を見当に班分け（本年は9名を2班）を行う。

#### 第1日午後

各班で、インターネット等も利用して、実験のテーマ、スケジュールを検討、決定。

#### 第2日～第3日午前

野外での測定、室内での実験。出席はとらない。

#### 第3日午後～第4日

実験のまとめ、発表の準備、レポートの作成。第4日の最後に発表。発表はパワーポイントを用い、各班持ち時間は20分とする。

このように、この授業では受講生が、自分で具体的なテーマを見つけ、実験計画を立て、得られた結果について発表するところに最大の特徴がある。実験計画では、明確な実験目的を立てることを要求する。その上で、それが明確に示せるためには、どのような場所での測定が必要なのかを考えてもらう。

毎年ユニークなテーマができるが、本年は

#### 大気汚染

- ・佐賀市内の交差点でのNO<sub>2</sub>量の時間変化（3時間値、24時間）
- ・佐賀市内における大気汚染調査（24時間値）

#### 水質調査

- ・34号線と交差する川の水質調査
- ・佐賀市内の中学校周辺の水質調査

であった。

以下に、大気汚染、水質調査の具体的な方法等について、学生の報告書を基に述べることとする。

## 2. 授業内容の例

### 題名：佐賀市内における大気汚染調査

目的：場所と高さによって、排気ガスの濃度にどれだけの差が生じるかを理解する。

交通量の多いところほど排気ガス濃度が高く、逆に交通量の少ないところはかなり濃度が少ない。また、高さに関しては、排気ガスが出る自動車のマフラーの位置、つまり低いところが一番濃度は高く、そこから高くなっていくにつれて徐々に濃度が低下すると思われる。

#### 大気汚染調査方法：

- ① トリエタノールアミンの20%溶液をろ紙(3x4cm)にひたし、それを写真用スライド枠に取り付けてNOxイオン捕集器を作り、乾燥を防ぐため密封容器(チャック付きのポリ袋)に保存。
- ② 交通量のもっとも多いと思われる交差点を中心に半径1km、0.5kmの場所に、高さ、0.3m・1m・1.6m・3m・10mのポイントを設置し24時間置いておく。
- ③ 24時間後、設置していた捕集器を回収しザルツマン試薬(酢酸50mlを加えた温水約900mlに、スルファニル酸5.0gを加えて完全に溶かす。N-1ナフチルエチレンジアミンを少量加える)5mlと捕集器のろ紙をサンプル管に入れ10分以上置き、赤色発色させる。
- ④ 光電比色計(株)ピカ精工、PEC-1)により濃度を調べる。

調査期間：平成13年8月1日～平成13年8月2日

#### 調査結果：

各ポイントにおける排気ガス濃度(表)

	0.3m	1m	1.6m	3m	10m
中心	2	1	3		
北1			38	40	
北0.5	5	12	4		
北東	5	0	1		
東1	2	5	26	0	1
東0.5	3	1			
南東	0	1	5		
南1	2	2	1	0	
南0.5	0	2	2		
南西	8	3	0	11	0
西1	5	4	47	35	18
西0.5	2	5	7		
北西	3				
平均値	5	8.4	10.33	11.5	6.33

注：測定は、何カ所かの交差点で実施している。最も濃度が高いと予想される交差点を定め、そこからの位置で例えば、北1、等命名したものと思われる。



## 題名：佐賀市内における水質汚濁～佐賀市内の中学校周辺の水質調査～

目的：佐賀市の各地域によって、水質にどれだけの違いがあるのかを確かめる。

各地域によって、人口や地理的条件・環境が違うので、やはり水質にも違いが出ると思われる。具体的に言うと、人口が多い都市部の水質が汚れていたり、悪くて、逆に人口が少ない地域の水質は比較的きれいで良いと思われる。

調査期間：平成13年8月1日

調査区域：佐賀市内の中学校周辺の川や、クリーク

佐賀市内のクリーク例



(注：インターネットから引用)

調査方法：

使用器具：ペットボトル、pHメータ、ECメータ、DOメータ、N-NO<sub>3</sub>パックテスト、N-NH<sub>4</sub>パックテスト、CODパックテスト、サンプル管

調査方法：

①地域を基準として、中学校周辺の川やクリークから、水を採取する。(最低1ヶ所であるが、できるところは2ヶ所で採取) 採取してきた水をビーカーに入れ、上記のメーターを使用し、各値を調べる。

(注：現場では、電気伝導度、ペットボトルで自作した透視度計による透視度の測定を行う)

②サンプル管に、採取してきた水を入れ、上記のパックテストを用い値を調べる。

実験結果：

人口分布

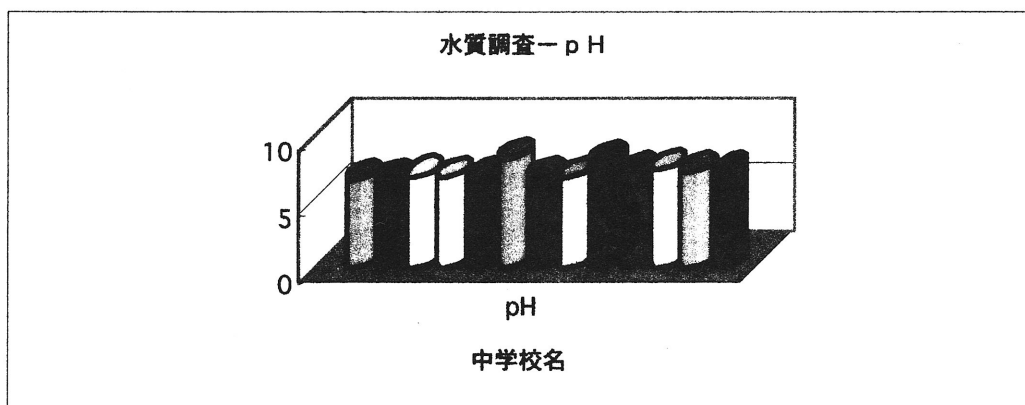
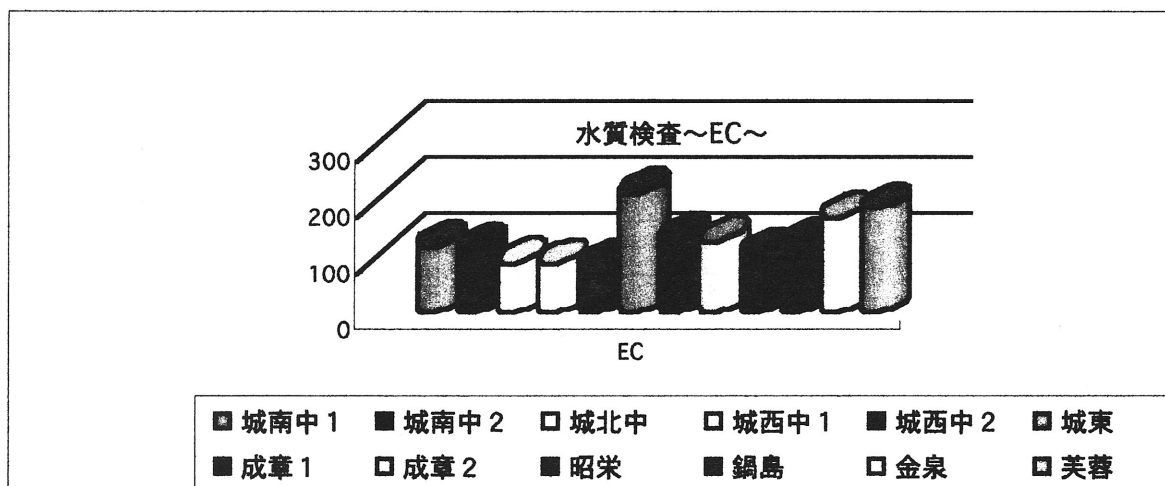
中学校名	成章	城南	昭栄	城東	城西	城北	金泉	芙蓉	鍋島
人口	15497	17731	22024	25306	20422	22796	10254	2103	22803
順位	7	6	4	1	5	3	8	9	2
区分	A	A	A	A	B	A	B	B	B

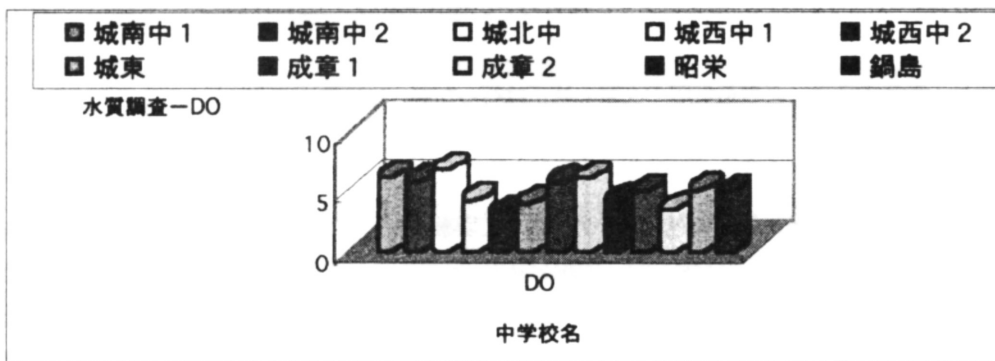
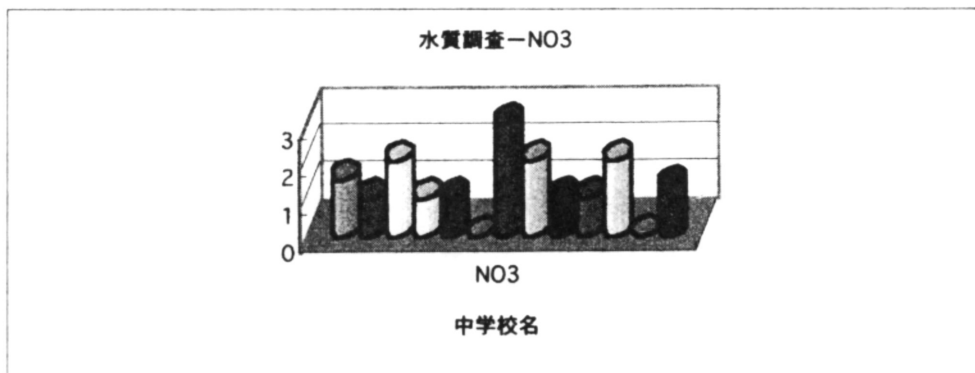
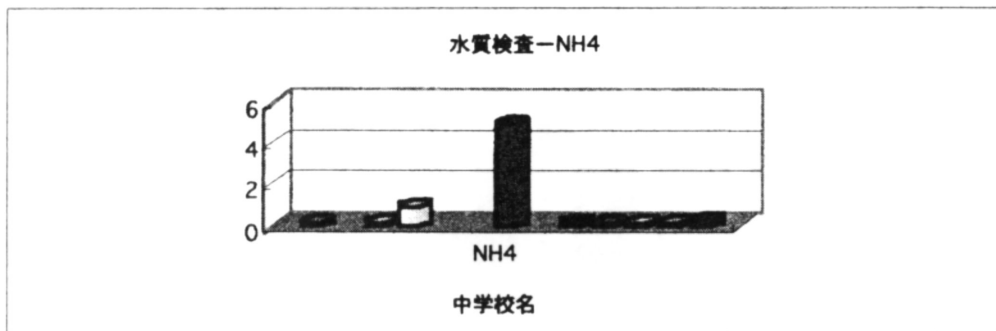
注：実験者が佐賀市の人口データを用い集計

水質調査結果

人口数順	中学校名	EC	SS	pH	NO <sub>3</sub>	NH <sub>4</sub>	DO
6	城南中 1	116.4	40以上	6.63	1.5	0.1以下	6.1
6	城南中 2	113.2	40以上	6.53	1		5.8
3	城北中	87.4	40以上	6.9	2	0.15	6.8
5	城西中 1	86.2	40以上	6.8	1	1	4.3
5	城西中 2	85.9	40以上	6.7	1		3.2
1	城東	212	34		0		4.01
7	成章 1	131.5	40以上	6.88	3	5以上	5.7
7	成章 2	127.3	40以上	6.86	2		6.1
4	昭栄	101.4	40以上	8.05	1	0.2以上	4.2
2	鍋島	121	40以上	7.12	1	0.1	5
8	金泉	169.1	40以上	7.35	2	0.15	3.47
9	芙蓉	184.6	21	7.22	0	0.1	5.15
	平均値	128	27.5	7.11	1.29	0.3	4.99

(注：SSではなく透視度 cm)

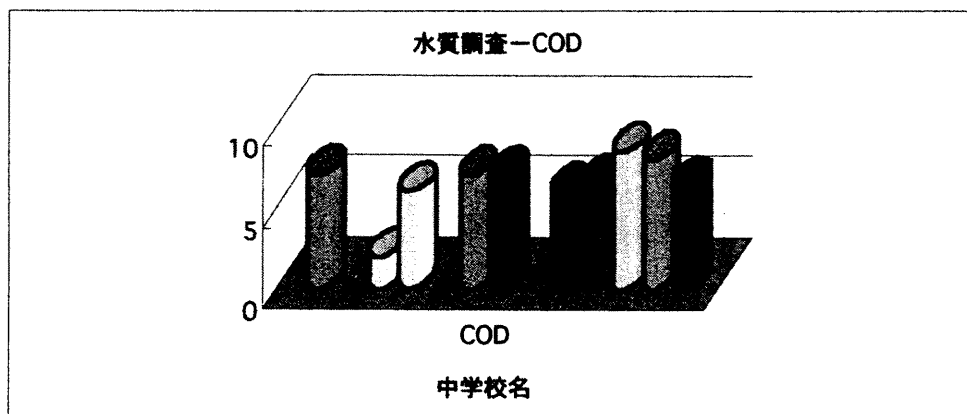




**考察：**

塩化物イオンが分かるECの値は、城東と芙蓉が高い数値だった。透度が分かるSSの値は城東と芙蓉だけが40cm以下だった。PHの値は城東と昭栄だけが8を超えていて、ややアルカリ性を示していた。窒素イオンの量が分かるN-NO<sub>3</sub>/NH<sub>4</sub>は成章が他に比べ極端に大きかった。酸素の量が分かるDOは城南、城北、成章が高い数値を示した。化学物質の含有量が分かるCODは人口が少ない地域である金泉、芙蓉で高かった。

全体的に見ると、城東と芙蓉がECとSSにおいて共に極端な値を示した。城西と鍋島が平均値に近い水質であった。人口と地域性に関しては、成章のように都市部だからといって人口が多いわけでもなかった。しかし、地方の芙蓉と金泉は、人口が極端に少なかった。



#### 結論：

予想した通り、都市部である城東は三項目において数値が極端で、人口が多いためにクリークの水質が汚れているといえます。また、田んぼに囲まれた城西、鍋島はある程度人口があったけれど、水質がきれいでした。しかし、地方である金泉、芙蓉は人口が少ないにも関わらず水質が汚かった。他の城南、成章、城北に関しては、一項目だけ極端だが後の項目は平均値を示していた。つまり、予想はある程度当たっていたが、予想に反して地方において汚かったのは下水施設が整っていなかったり、測定場所の条件の違いによるものと思われる。だから都市部だと水質が汚れている、地方だと水質がきれいだということは一概にはいえなかった。

#### 感想：

もう少し調べる個所を増やせば良かった。後人口とかの条件などの他に水のある場所の条件なども調べておけば良かった。

(注：以上の文章は項目の順番の変更、必要最低限の文章の修正は行ったが、ほぼ原文のまま)

### 3. おわりに

不十分、不理解な点があるが、この班は授業の趣旨を十分理解して実験を行っている。おそらく、高校で「科学部」等で活動していた学生を除けば、自分でテーマを見つけ、仮説を立て、それを立証するようなことは初めてであろう。学生の戸惑いは大きいものと予想していたが、個人差(班での差)はあるが、結構こなしていたのは少々驚きである。このグループも含め、実験結果を論理的に解釈することはほとんどできない。また、いい結果を得ることが重要であるとは考えるが、それらをいかに他人に分からせるか、レポートも含めたプレゼンテーションの重要性については教えられていない。

いずれにせよ、このような総合的な実験を行わせると、現在の教育の問題点が見えてくる。それは、同時に学生にとっても、自分たちに何が足りないのかが分かることであろう。教養教育での総合的な実験の重要性を改めて認識するものである。

最後に、レポートを使わせていただいた学生諸君(石本淳二、梅崎宏、久納美香、円田博子、丸田美加、敬称略)に感謝します。

全学教育科目に対する学生による授業評価－自然科学分野を巡って－

佐賀大学教授 中原 徹

酷暑を経て、牧の戸から久住山頂（1787m）をめざす山道は<sup>のりうつぎ</sup>糊空木<sup>い</sup>や<sup>すすき</sup>芒の群生に囲まれていた。呼吸を整えつつ登る当方の背後から、いくつかの大学の生きのよい学生たちの対話が流れてきた。「…大学でも、もっと授業のレベルを上げてもらいたいよね…」。「…先生に面と向かって言えばあとがこわいし…」。凡そ100名の学生からなる「循環・共生型社会をめざして」をメインテーマとする第26回九州地区国立大学間合宿共同授業（2001.8.24(金)－8.28(火)）の一コマである。

昨（2000）年度前学期に、本学全学教育協議会の命により、全学教育センター授業評価WGは394の授業クラスに対し、366クラスにおいて授業評価アンケートを行った[全]。実施率は93%である。15項目（4段階評価）への回答と自由記入欄への記述とを無記名で求めた。データ処理は次の3種類で行った。

- イ）各分野に対し、学生による4段階評価の平均値の分布を設問毎にレーダーチャート7頁に示した。
- ロ）各設問に対し、学生による4段階評価の回答総数14204件を全分野毎に縦に並べて横棒グラフ15頁で示した。本アンケートでは選択項目に「どちらでもない」を外している。
- ハ）366の各クラスに対し、上の二つと同様のレーダーチャート及び横棒グラフによる処理結果は、各教官が授業の内容・方法の改善に資するという本アンケートの主旨に沿って、アンケート本体とともに当該教官のみに送付し、報告書には掲載していない。分科会では第5分野の平均値に対する一クラス（発表者担当）のレーダーチャートを重ね写しにして学生による批判の差異を見比べた。第5問（授業の理解のしやすさ）は厳しく、第11問（授業への情熱）は良しとしている。

回収された自由記入欄への記述は全分野に亘り3173件に及ぶ。当WGによる査読の後、各分野毎に無修整で74頁に収め、公表した。（個人名および極端な事例数件のみは公表を差し控えた。）羅列の方法については各教官、学生が読みやすいように並びに各授業への恣意的な餞別等を許さないための工夫を施している。

他方、アンケート調査を行うこと自体への学生、教官からの意見は本学全学教育センター広報委員会発行の広報Vol.5にある特集「授業評価を考える」をもって替えた[広]。

本分科会では自然科学分野に対応する佐賀大学全学教育科目のうち、主題科目第5分野（数理と自然 Mathematics, Science and Nature）及び第6分野（科学技術と生産 Technology and Industry）について学生による授業評価の結果を両分野の部会長に依る概評を中心に報告した。

第5分野では、総じて、準備がよく行き届いた授業あるいは熱意の在る講義への評価と必ずし

もその範疇にはないと思われる授業への批判とに二分されている。レーダーチャート及び横棒グラフから第5分野 1000 余名の回答者中、問2. (予習と復習を行っていますか。) の 14.3%は、1位の第2分野 (思想と歴史 Thought and History, 16.9%) から6位の第3分野 (現代社会の構造 Structure and Modern Society, 8.6%) までの六分野中、3番目に位置している。他の設問についても、問5. (授業の理解) を除いて、六分野に限ってみれば、問2.と同じく中位の位置関係にある。

第6分野では、評価項目の多くは平均値3以上であり、第6分野の講義はおおむね良い評価を得ているものと考えられる。ただし、予習復習、学習態度、シラバス、板書の方法の4項目で評価が低い (平均値3以下)。この評価は他の分野とも類似している。学生に興味を持たせ、学習意欲を起こさせるような講義が必要であり、シラバスを分かり易くし、板書を丁寧にする必要がある。第6分野 1200 余名の回答者中、問5. (授業は理解しやすいように説明されていますか。) の 82.3%は1位の第4分野 (人間環境と健康 Human Environment and Health, 89.6%) から6位の第5分野 (数理と自然, 62.3%) までの六分野中、2番目に位置している。悪いまたはやや悪いは 17.7%。文科系の学生には専門用語は分かりにくいとの意見があったが、理工学部と農学部の受講生は約 60%であるので、文系の学生もある程度は教官の説明を理解しているものと思われる。

#### 参考

[全] 全学教育科目に対する学生による授業評価報告書, 佐賀大学全学教育協議会 (佐賀大学全学教育センター授業評価アンケート調査WG), 2001年 (平成13年) 3月, 111頁.

[広] 特集「授業評価を考える」, 佐賀大学全学教育センター広報, 5, 2001.4, 3-12.

1) ユキノシタ科落葉低木。幹を擦ると、ねばねばとした感触を得る。葉は楕円形または卵形。葉先は急に尖り、縁に鋸歯がある。花弁は4枚からなり、2cm程の可憐な白。

## 自然科学部会報告

佐賀大学教授 中原 徹

自然科学部会は10月5日（金）－6日（土）の両日、統一テーマ‘改めて問う教養教育の目的’に沿って、永野正光氏（佐賀大学教授）及び当報告者司会の許、次の五件のレポートが行われた。天候に恵まれた経済学部1号館2階第二講義室には述べ50余名の出席を頂いた。

(1) 末崎幸生氏（佐賀医科大学教授）‘医科大学における物理教育、

単科大学における講演者自身の四半世紀に亘る研究に根差す、一般教育物理学の実践例である。少ないスタッフと佐賀大教官とのタイアップで維持されている手作り授業の工夫が込められている。

(2) 佐藤三郎氏（佐賀大学助教授）‘フィールドワークを取り入れた授業を目指して’

佐賀大学全学教育主題科目第6分野（科学技術と生産）のコア授業‘環境と電気工学との関わり－巨大システムの安全性を検証する－’に、玄海原発見学会を組み込まれた実践例である（2001年6月9日（土）、30名余の学生参加）。分科会当日、出席者より見学会をスポンサー付きとすることの是非を問う質疑があった。レポートには学生からの電力会社（47項目）及びエネ庁原子力安全担当課（24項目）への生の質問が明記されている。

(3) 和佐野喜久男氏（佐賀大学教授）‘全学教育への教官の思わくと学生の期待’

佐賀大学全学教育主題科目第6分野（科学技術と生産）の個別授業‘農耕起源を考える’（120人中81人合格）の実践例である。全学教育全般及び講演者の授業（2001年7月3日（火））に対する学生の意見77項目を明示された。佐賀大学と佐賀医科大学との統合を考える場合に、他の追随を許さない、国立大学として存続しうる特性とは何か、に言及されている。

(4) 半田駿氏（佐賀大学教授）‘一般教育での地球（環境）科学実験’

講演者による7年前からの環境に重点を置いた、学生主体の地球科学実験の実践例である。2001年度は集中講義（7月31日（火）－8月3日（金））で行われ、佐賀市立の9つの中学校周辺の水質調査と市内の大気汚染（車の排気ガス）調査との実験結果をスクリーンに明瞭なカラーで表示された。学生自身によるテーマ設定、仮説、立証の思考を伴う実験科目の教養教育での重要性が述べられている。

(5) 中原徹氏（佐賀大学教授）‘全学教育科目に対する学生による授業評価－自然科学分野を巡って－’

2000年度前学期に佐賀大学で実施された、全学教育科目の授業評価の全学教育センターWGに

よるとりまとめ（2001年3月、111頁）の報告である。処理結果の公表の仕方、授業評価報告書には掲載せず、当該教官のみに送付した出力データの中身及び当該分野の平均値との比較の例は対応するレーダーチャート及び横棒グラフのトランスペアレンシーズの重ね合せで示された。主題科目第5分野（数理と自然）及び第6分野（科学技術と生産）を中心とする学生による評価の傾向と改善を要するであろう項目とについて述べられた。

終りに、各講演者のレポートはそれぞれの教育・研究に基づき培われた意思を含んでいる。会期中、出席者のみなさまからは教養教育の更なる充実に向けて熱心な質疑応答を頂いた。

## ネットワークを利用した英語教育システム

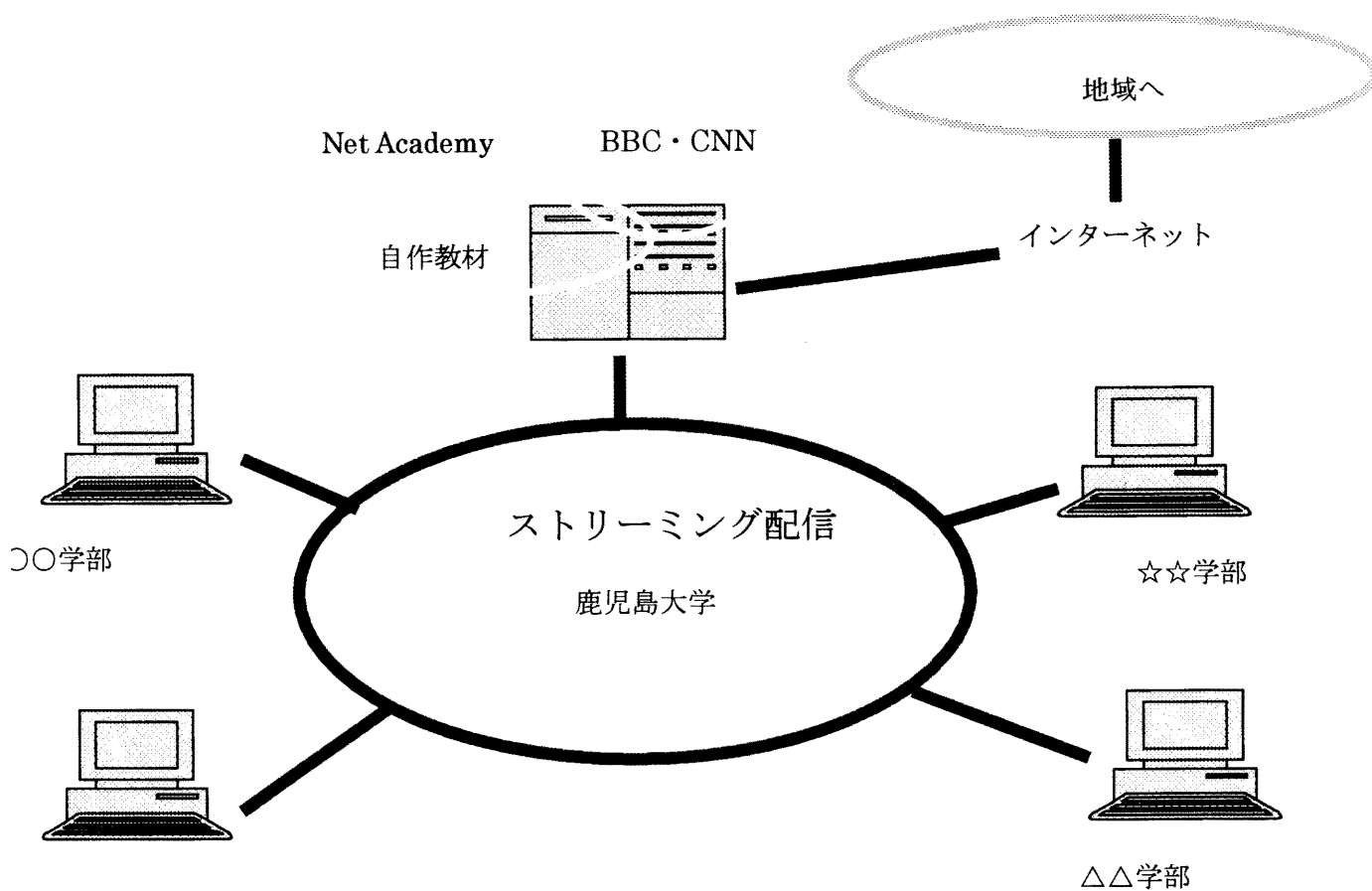
鹿児島大学 法文学部 人文学科

竹内勝徳

(共同発表者) 板倉隆夫 宿久洋 下舞三男

安田茂 熊澤典良 堀江雄二 三仲啓 下園幸一

### 1 学内ネットワークについて



### 2 BBC・CNN 衛星放送について

- ・BBC・CNN のネットワーク放送
- ・リアル・システムを利用したストリーミング配信システム
- ・圧縮データによるリアル・ファイル
- ・ホームページの利用 (スクリプトなど)
- ・録画テープをオン・デマンド教材に (予定)
- ・JGN 向け非圧縮映像ライブラリーの整備 (予定)
- ・ロースピード・ファイル(mp3)の整備 (予定)

### 3 ネットアカデミーについて

#### 特徴

- ・ 24時間、学内ネットワークに接続されているパソコンなら、どこからでも学習できる。
- ・ マルチメディア対応である。
- ・ 学習レベルに応じてプログラムが決まる。
- ・ 全学生に学習の機会を与える。

### 4 学外へのサービス

- ・ 鹿児島大学のホームページを通じて、学外に教育コンテンツを提供できる。
- ・ この場合、著作権法のため、JP-Netのように、オリジナル教材が必要となる。
- ・ SOI（慶応）のような授業・講義風景の録画・生中継とは違った形。双方向性、テレビ・プログラム型（マルチメディア、BGM、映像効果）など。

### 5 自作教材の開発

- ・ マルチメディア英語教材
- ・ ネットワーク対応
- ・ デジタル機器の利用
- ・ コンテンツ開発を授業にフィードバック
- ・ 地域性を生かすー主体的コミュニケーション  
(あくまで実験段階である)
- ・ 教材メニュー

鹿児島探訪ビデオ

ラップで学ぶ英会話(mp3 ファイル)

\*映像、音声、音楽、編集、全てオリジナル、自作自演である。

(produced by K.Takeuchi and J. Reimer)

#### (1) 鹿児島探訪ビデオ

第1章 鹿児島神宮

第2章 鹿児島空港

第3章 竜門の滝

第4章 荒田八幡

第5章 与次郎が浜

第6章 県庁舎

第7章 展望台

・ 鹿児島探訪ビデオ付録（予定）

・ 練習問題（JAVA スクリプト）

- ・キャプション
- ・日本語訳（ダウンロード）
- ・授業で使用する際の登録・評価プログラム

(2) ラップで学ぶ英会話

- 1 自己紹介、鹿児島紹介編
- 2 環境問題編
- 3 住所、住居の説明編

特徴

「英語は発音して初めて経験となる。」(村松増美『私も英語が話せなかった』)

- ・ 英会話フレーズを文字通り体得する。
- ・ 楽しく学習する。
- ・ 覚えて即実用。

歌詞の一部

I've been living in this city for about (7 years).

I like (to drive around my city). It's really a lot of fun.

My town is situated in (the South of Kyusyu island).

It takes you (an hour) to get here from Tokyo by air.

a: Sakurajima!

b: Have you ever been there?

a: Kinkowan!

b: Have you ever seen it?

a: Shochu!

b: Have you ever drunk it?

a: Black Pork

b: Have you ever eaten it?

Why

do you stay here?

I wanna know the reason.

How long

does it take you

to come to this university?

How much  
did you pay  
for the thing you bought last night?

What language  
do they speak  
in your country?

2

What do you need to  
live here  
every day comfortably?

I can tell  
how you can lead  
a wonderful and cool life.

Don't forget to  
keep friends with  
someone who understands you.

Don't forget to  
keep in touch with  
someone whom you can talk to.

Saigo  
He's very great.  
Nagasawa  
He's ambitious.  
Girls  
They are cute/  
Boys  
They are cool.

The warm weather will make you  
just feel so fine and happy.

Happy feeling will make you  
find good friends and good chance.

Good chance will make you  
get a great success anywhere

A great success will make you  
find Kagoshima great.

What Kagoshima is now is due to good old Meiji Restoration.  
We are proud of what our heroes did.  
We are told that they built modern Japan.  
Culture reflects the past history.  
Preserve this important and great cultural heritage.  
Try to make all these happen.

### (3) Rap English with E-Cat

- ・デジタルコンテンツの利点
- ・映像製作、作曲、音楽製作が手軽にできる。
- ・音声、映像が劣化しない。
- ・編集の自由度が格段に高い。
- ・ネットワーク対応として利用しやすい。
- ・地域に対して提供しやすい。等

### 6 鹿児島大学のデジタル映像編集機材

- ・ Canopus DVStorm
- ・ Pinnacle System DV500
- ・ Adobe Premiere
- ・ dps Velocity (?)
- ・ Roland Cakewalk pro
- ・ マルチメディア実験スタジオ

\*メディア関連の授業を利用して教材を作成中である

## 7 今後の展望

- ・なるべく早く完成させ、ホームページに載せる。
- ・幼稚園から小中高、大学、一般の方々に広く利用してほしい。学校現場でも利用してほしい。
- ・機器を充実させ、今より質、量とも増やす。
- ・開発技術を授業にフィードバックする。

## カリキュラム改変に伴う授業開設の工夫と問題点

九州大学助教授 山村 ひろみ

### 1. はじめに

本発表は、大学における外国語教育はどうあるべきか、あるいは、どのように行うべきかといった外国語教育そのもののあり方を論じるものではなく、問題となる外国語教育をその理念に沿った形で実施するためにはどのような環境が必要か、また、その環境を確保するにはどのような工夫が必要であるか、さらに、そのような工夫にも拘わらず直面せざるをえない問題点はどのようなものであるかを、筆者が所属する部局の経験を例としながら考察するものである。

### 2. 新カリキュラムの導入と「単一から多様へ」の提唱

九州大学では平成11年度より全学教育科目（当時は全学共通教育科目）に大幅な改変が行われ、外国語教育にも新たなカリキュラムが導入されることになった。この新カリキュラム導入に対応すべく、九州大学における外国語教育の責任部局である言語文化研究院（当時は言語文化部）は外国語教育に対する新たな理念「単一から多様へ」を提唱するに至った。ここでは、まず、この新理念について簡単に紹介しておきたい。

この「単一から多様へ」という理念は、従来の、どの学生に対しても一律に行われてきた外国語教育に対する疑問・反省から生まれたものである。すなわち、大学における外国語教育はその受け手である学生が持つ様々な異なるニーズに広く応えるものでなければならぬという信念に基づいたものなのである。もちろん、ここで言う「ニーズ」とは各学生のレベルに則した適切な科目を効率よく提供するという内容をも含んだものであり、単に学生の希望をかなえればよいといった安易なものでないことは言うまでもない。

さて、この新理念のもと、九州大学における外国語教育はそれまで「外国語科目」という枠組みの中で同等に扱われていた各科目が大きく言語文化科目Ⅰと言語文化科目Ⅱ・外国語コミュニケーション科目に二分されることになった。現在、九州大学では、卒業にあたり文系学部は第1外国語7単位、第2外国語5単位、理系学部では第1外国語6単位、第2外国語4単位が必修となっているが、上記の外国語科目の区分は第1外国語、第2外国語の双方において実施されている。ただし、外国語コミュニケーション科目については後述するように制約がある。

言語文化科目Ⅰとは低年次に開講され卒業に必須の単位として換算されるもので、「国際社会を積極的に生きるに必要な、また、専攻分野を学修するに必要となる外国語運用能力の涵養と向上、ならびにグローバルな異文化理解と豊かな国際感覚を培うことを目標とする」と定義されている。一方、言語文化科目Ⅱ・外国語コミュニケーション科目は主に高年次に開講される当該言語のより高いレベルの修得を目指す学生向けの科目である<sup>2)</sup>。全学教育科目の要項によれば、言語文化科目Ⅱは「言語文化科目Ⅰの履修に引き続いて外国語運用能力のさらなる向上または第1、

第2外国語以外の外国語の学修を自ら望む学生を対象として開講される」とあり、外国語コミュニケーション科目については「高度の外国語運用能力の修得をめざす学生のために開講される」とある。これら言語文化科目Ⅱ・外国語コミュニケーション科目はその趣旨から単位数も言語文化科目Ⅰの倍となっており、取得単位は外国語科目としてではなく、「学問研究の急速な発展やその社会利用の多様な展開に対応して学生の個性ある多面的な能力を柔軟に発揮させることを目標とした総合選択履修科目」として認定されることになっている。

以上が新カリキュラム導入に際し我々の部局が考案した外国語教育の大枠であるが、次節ではこの大枠の中で設定された各科目を効率的かつ機能的に実施するために我々が工夫しなければならなかった点を述べていく。

### 3. 新カリキュラム運営のための工夫と問題点

#### 3.1. 適正なコマ数の算出方法

我々がまず取り組んだのは言語文化科目Ⅰにおける1クラスの学生数の平均化であった。それは既修外国語、未修外国語に拘わらず、上述した2区分のうち何よりもその学習効果が問われるのは低年次に開講される言語文化科目Ⅰにおいてこそであるという認識からであったが、その背景には、特に教官の側からの1クラスの人数の大小が学習効果上の不均衡に繋がっているという長年の不満があったことを忘れてはならないだろう。従来、九州大学における外国語教育に費やされる年間の開講コマ数は単に当該言語の選択学生数の割合に応じて配分されていた。しかし、この方法によって算出されたコマ数に従った各言語の1クラスの平均学生数は実態とかけ離れたものであったのである。というのも、その算出方法には当該言語を実際に受講する学生延べ数が考慮されていなかったからである。そこで新カリキュラム導入を契機に、1クラスの学生数の平均化を可能にする適性なコマ数算出方法が考案されることになった。それは、以下のように、各学生の卒業に必要な単位数を基礎としながら当該言語の実質的な受講者数を計算し、それに応じて各外国語科目の開講に必要なコマ数を算出するというものであった。

各言語の適正コマ数算出方法（学生数は2000年度のもの）

1. 1年数の総数 2340（文系学生数 740、理系学生数 1600）

第1外国語は英語として計算。

2. 卒業必修単位数に基づく英語の学生延べ人数：

文系 英語必修単位数 7単位、理系 英語必修単位数 6単位。

文系学生延べ人数： $740 \times 7 = 5180$ (a)

理系学生延べ人数： $1600 \times 6 = 9600$ (b)

合計： $(a) + (b) = 14780$ (c)

3. 未修外国語の卒業単位数に基づく学生延べ人数：

文系 必修単位数 5単位、理系 必修単位数 4単位

文系学生延べ人数： $740 \times 5 = 3700$ (d)

理系学生延べ人数： $1600 \times 4 = 6400$ (e)

合計：(d)+(e)=10100(f)

4. 卒業必須単位数に基づく外国語科目履修学生の総延べ人数

(c)+(f)=24880(g)

5. 英語が必要とするコマ数：

14780(c)÷24880(g)=0.594 → 言語文化科目Ⅰの総コマ数の59.4%

6. 未修外国語が必要とするコマ数：スペイン語の場合

1年次学生延べ人数 124×4=496(h)

2年次学生延べ人数 88(i)

合計：(h)+(i)=584(j)

コマ数：584(j)÷24880(g)=0.023→言語文化科目Ⅰの総コマ数の2.3%

2001年度の九州大学の外国語の授業は以上の算出方法によって配分されたコマ数に従って運営されているが、各語の言語文化科目Ⅰの1クラスの平均人数は35~36名となっている<sup>3)</sup>。

### 3.2. 到達目標の設定とその達成

新カリキュラム導入にあたっては各語の到達目標の設定とその達成も大きな課題であった。もちろん、これは従来九州大学で実施されてきた外国語教育に何の到達目標もなかったことを意味するものではない。これまで我々の大学で外国語教育に従事してきた者は誰もが各学生の到達すべきレベルを想定しつつ日々の授業を行ってきたはずだからである。それでは何が問題なのか。それは簡単に言えば、各担当者が想定してきた到達目標にコンセンサスがあったかどうかということになる。

大学の外国語教育に携わる者は誰も自分の学生に対して「この程度のことは知ってもらいたい、理解してもらいたい」という要求を持っている。しかし、その要求のレベルは担当者の個人的信念、本人の学習経験、教授経験、専攻分野等によって様々なのが実情である。その結果、同じ学習時間を費やしたにも拘わらず、担当者によって学生の当該言語に対する知識、理解度に大きな差が生じるという残念な状況が生じている。このような学習効果上のバラツキという弊害を無くすために我々が取り組んだのが、各語科の到達目標の設定とその達成なのである。

例えば英語科では、到達目標の設定とその周知の実践として統一教科書 *A Passage to English* を発行した。この教科書には九州大学の英語教育に関わる者たちが自分の学生に対してこれだけは必要だと考える英語のエッセンスがつまっている。今年の新入学生はみなこの統一教科書に基づいた授業を受けているため、少なくとも英語に関しては彼らは同じ到達目標に向かって学習を進めていると言ってよかろう。また、中国語科では担当者が集まり九州大学の学生専用の教科書を作成するのみならず、統一試験も試みている。このように新カリキュラム導入を機に、各語科ともに担当者間のコンセンサスに基づく到達目標を設け、その達成に向け努力を重ねてきた。しかし、全体的にはまだまだ問題があると言わざるをえない。担当者間の総意に基づく到達目標は得たものの、それをいかに達成するかという方法論において再び各人各様となっているからである。

到達目標達成の具体的方策はいかにあるべきか、これは実にやっかいな問題である。なぜならそれは各担当者の教授法に直接立ち入ることになるからである。教員にとってその授業は侵すこ

とのできない「聖域」とはよく言われることだが、この意識はなかなか払拭できるものではないのである。まさにそのような旧態然とした教員に刺激を与えるためであろう、最近どの大学でも学生による授業評価が頻繁に実施されているが、それとて実際どの程度の効果を上げているのか。仮に授業評価で高い評価を得た教員の教授法が提示されたとしても、誰もがその方法をうまく活用できるわけではないだろう。「授業」というものが生身の人間から成るものである以上、同じ教授法が常に同じよい効果をあげるとは言いがたいからである。それではいったい共通の到達目標を達成するにはどうすればよいのか。今のところこの問いに対する明確な答えはない。しかし、その回答を得るために不可欠だと思われることはある。それは何よりも当該言語、当該科目を担当する教員間のコミュニケーションを活発化するということである。各自が到達目標を達成するために用いている方策の開示、各自が経験した、あるいは、見聞した様々な教授法の紹介、時には学生たちの噂話さえも貴重な情報になる。いずれにせよ「授業」に関わるすべての情報を互いに交換し、担当教員間のバリアーを取り除いていくのである。そうすることによって初めて教員の「聖域」は外部に向かって開かれたものになる。

### 3.3. 問題点

最後に、新カリキュラム導入に際し残された課題について述べておきたい。もっとも大きな問題は「言語文化科目Ⅱ」と「外国語コミュニケーション科目」の運営についてである。先に述べたように、これら二科目は主に高年次学生を対象としたものなのだが、その開講クラス数、開講言語には不均衡な点が見られるのである。

まず、開講クラス数の不均衡については、特に「言語文化科目Ⅱ」において顕著である。例えば、英語科はこの「言語文化科目Ⅱ」として2002年度12科目29クラスを予定しているが、英語以外の未修外国語では各1クラスの科目をせいぜい2科目から4科目しか用意していない。このように言語によって「言語文化科目Ⅱ」の陣容が異なるのは、「言語文化科目Ⅰ」と「言語文化科目Ⅱ」の運営に対する考え方が語科によって異なっているからである。とりわけ未修外国語の「言語文化科目Ⅱ」のクラス数が少ないのは、担当語科の多くがそのコマ数はできるだけ当該言語の基礎づくりである「言語文化科目Ⅰ」に投入すべきと考えていることに因る。従って、英語とそれ以外の言語に見られる開講クラス数の違いは、既修外国語と未修外国語の立場の違いと言うこともできよう。

一方、開講言語についての不均衡は「外国語コミュニケーション科目」において見られる。現在、この科目を開講しているのは英語とドイツ語だけだからである。九州大学の全学生のニーズを考えるならば当然すべての外国語においてこの科目が開講されるべきなのだが、それが不可能なのは、各語科の担当者数に偏りがあることに因る。つまり、この科目は、目下のところ、担当者数にある程度余裕のある語科しか開講できない状態なのである<sup>4)</sup>。この問題を解決するには、我々部局の教員配置について長期展望にたった検討が必要だと思われる。

## 4. まとめ

以上、平成11年度のカリキュラム改変に際し、九州大学における外国語教育の責任部局であ

る言語文化研究院が取った様々な工夫および問題点を見てきた。その結果、新カリキュラム導入にあたり、1クラスの学生数の平均化、各言語の到達目標の設定とその達成方法の検討が行われたことが明らかになった。しかし問題は、そういった工夫が実効性を発揮するようになるためには、部局全体の議論と理解が不可欠という点にある。現在のように、大学における教育のあり方が第三者の目にさらされる中であっては、たとえどんなに良い授業を行おうと、それが個人のレベルに留まっている限り何の評価も得られないし、何よりも外国語教育そのものの効果を上げるには、各言語の担当者数の調整等、部局全体を視野に入れなければ解決のできない問題を無視するわけにいかないからである。従って、ここで紹介した工夫が真に功を奏すためにも、まずは担当教員たち自身がその殻を破り、互いに議論し合い相互理解を深めていく必要があると考える。そうしてこそ初めて我々語学教員は、主張すべきを主張し、大学における外国語教育を正しい方向に導いて行くことができるのではなかろうか。

#### 注

- 1)九州大学では卒業必修単位として認められる言語文化科目Ⅰとして、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、朝鮮語、スペイン語、日本語の授業が開講されている。このうち日本語は留学生専用である。また、通常、英語は既修外国語、英語以外は未修外国語と呼ばれている。なお、第1外国語、第2外国語の選択は一部の学部を除き原則的には学生の自由に任されているが、実際には学生の大部分が英語を第1外国語として履修している。
- 2)低年次とは1、2年次を、また、高年次とは3、4年次を指す。つまり、新カリキュラムに従えば、九州大学の学生は希望さえすれば専門課程に進級後も外国語履修が可能ということである。
- 3)この平均学生数は各語の総学生延べ人数を配分されたコマ数で割った数であり、実際の外国語のクラスがすべてこの人数で運営されているわけではない。(例えば、英語科目には80名以上の大クラス、50名程度の中クラス、20名以下の小クラスの3種類がある。)このように1クラスの人数に違いが見られるのは、配分されたコマ数を実際どのように運用するかはすべて各語科の裁量に任されているためである。
- 4)しかし、英語科は必ずしも担当者数に余裕があるわけではない。英語科が「外国語コミュニケーション科目」を開講しているのは主に全学的要請に因る。

## 第2外国語は短期集中で

琉球大学 吉井巧一

### 1. はじめに

いわゆる共通教育科目の中でも、第2外国語科目は、主として以下のような理由により、かなり特殊な科目であると言えるであろう。

- 言語の種類・数は大学により様々であるが、必修・選択科目として殆どすべての大学で科目として提供されており、
- 学習の必要性は万人が認めているにもかかわらず(???)、
- 学習効果・成果については批判が少なくない。etc.

ちなみに、第2外国語科目の履修に関して、筆者が個人的に担当クラスの学生等にたずねた、当事者である学生の意見をいくつか紹介する。

- 「(第2)外国語は他の教養の科目と比べて学習に手間や時間がかかる。ただ講義を聞いているだけでは身につかない。自分からのアクションが必要。」
- 「他の科目と平行しての週2回の授業は負担。他の科目の学習もあり、授業の後にすぐ復習や宿題をするのが難しい。」
- 「その為、とりあえず(その場限り)の学習になる(身につけることよりも、単位さえとればいいというふうになってしまう)。」
- 「普段の講義は毎回同じような講義の繰り返しでメリハリがいまいちない。だらだらと学期がすぎてしまう。」
- 「時間を費やしても身につけにくい。」etc.

このような否定的な意見が少なからず聞かれた。改善する余地はないのだろうか。

### 2. 短期集中方式のメリット

そこで、学生の不満をなるべく解消すべく、またより効果的な外国語学習法の一つとして、いわゆる短期集中型の学習法を考慮してみる。この方法の長所と思われる点は、以下にあげるようなものが考えられよう。

- 集中講義方式では、学習の負担が(他の科目の学習がないため)多少軽減される。
- 学習に対する集中度が高まる。
- 学習効果(記憶定着率)が高まる。
- 短期間に一定の成果をまとめて学習を完結できる。etc.

当然ながら、短所も考えられる。

- 主として休暇期間中を利用するため、他の行事・計画等と重複する可能性がある。
- 学習の負担が短期間に集中する。

- 継続的な学習が持続しにくい。etc.

ところで、我国の一般的な大学の平均的<sup>2</sup>外国語学習時間は以下のようなものが大半であろう。

- 1回90分×週2回×15週×2学期 = 90時間 = 4単位
- 1回90分×週1回×15週×2学期 = 45時間 = 2単位

もし、学習効果をより高めるために、集中講義方式で第2外国語を学習するとすると、具体的には、たとえば試案では次のような方法が考えられる。

- 1回6時間×週5回×3週 = 90時間 = 4単位
- 1回6時間×週5回×1.5週 = 45時間 = 2単位
- 「ドイツ語実践研修（合宿）」3泊4日 = 30時間 + 事前・事後講習 = 2単位
- 「海外研修」 2〜3週間 = 2〜4単位

カリキュラムの大幅な変更をしなくとも、上述のように様々な実施方法が考えられるのではなかろうか。

その際、学習目標として設定すべきポイントは、次の3点を中心としたいと考えている。

- 1) 言語の構造（文法のあらまし）
- 2) 簡単な会話（発音） + （基本）語彙
- 3) 外国事情

### 3. まとめ

なぜ英語以外の第2外国語を学習するのか。現代の学生を十分納得させるだけの答が見出せない昨今の状況では、教養か実用かといった不毛の議論ではなく、まず当該言語の基礎を徹底して訓練し、異文化と触れる楽しさを経験させることが、何よりも重視されるべきであると言えないだろうか。そのためには、様々な学習機会を選択肢として提供し、学習者のニーズに応じていく努力が教員に求められている。論より証拠。まず筆者担当の初級ドイツ語クラスの一つを次学期短期集中方式で開講してみて、どのような学生が何名程参加し、どのような学習効果が結果として出たのか、もし機会が与えられれば、いつか実践報告をさせていただきたいと願っている。御経験がお有りの方には御教示いただければ幸甚です。いずれにせよ、興味等お有りの方は筆者まで御連絡下さい。(koyoshii@ll.u-ryukyu.ac.jp)

## 福岡国際大学におけるG-TELP利用と学生の英語力推移についての一報告

福岡国際大学教授 木下正義  
福岡国際大学助教授 福岡龍明

### はじめに

本学は1998年創立の一学部一学科(国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科)の新設大学で、50分授業、半期完結のセメスター制を採用している。語学は英語、中国語、韓国語の中から一科目選択必修で、授業は週2回、各学期3科目3単位で、12単位必修となっている。英語履修者に対しては、英語運用能力を客観的に査定する一つ的手段として、1999年以降G-TELP(General Tests of English Language Proficiency; 日本名:国際英検)オンデマンドテストの学内一括受験(受験料は大学側負担)を義務づけている。このG-TELPオンデマンドテストは Criterion-Referenced (CR) Test (目標基準準拠テスト、即ち絶対評価テスト)である。CR Test は、テストする基準や範囲を設定した上で、テスト項目に対して受験者がどのレベルまで正解を得られたかや達成度を評価するものである。テストの得点は、所属する集団の中で個人が相対的にどの位置にいるかの情報ではなく、テストの素材内容に対する個人の習熟度を示す指標としての性質を有する。

本学におけるG-TELPオンデマンドテストの用途は1)プレイズメントテスト(新入生クラス分けテスト); 2)アチーブメントテスト(入学者の学力追跡テスト)の二つにわけられる。1)に関しては 1999年度、2000年度、2001年度の新入生について実施した。また、2)に関しては、1999年度入学生に対し、入学時、1年次終了時、2年次終了時の3回、2000年度入学生に対しては、入学時、1年次終了時の2回実施した。使用したテストレベルは全て Level 4 (英検準2級—3級とほぼ同じレベル)であった。

本報告では、福岡国際大学におけるG-TELP導入・活用の実態に関して、以下の2点について評価学的所見を交えて述べることにする。

- 1 プレイズメントテスト並びにアチーブメントテストとしてのG-TELP導入の意義と課題
- 2 G-TELPの結果を通して見た本学生の英語力についての評価学的所見

### 本論

#### 1 プレイズメントテスト並びにアチーブメントテストとしてのG-TELP導入の意義と課題

##### 1.1 G-TELPとは

G-TELPとは、General Tests of English Language Proficiencyの略で、英語を外国語として学ぶ人たちの実用的な英語運用能力を測定・評価することを目的として、Robert Rado博士(元Georgetown University応用言語学部長)をキャップとするチームによってアメリカで開発されたテストである。開発のコンセプトは、ネイティブスピーカーでない人が、実際の状況下で、どの程度英語をコミュニケーションの手段として駆使する能力を有しているかを測定するというものである。現在このテストの開発及び実施本部は米国カリフォルニア州サンディエゴ州立大学内のInternational Testing Service Centerに置かれ、東京に日本事務局、また大阪に事務所を有する。

G-TELPの特徴の一つは、受験者に適したレベルを選択して受験することが可能な点である。G-TELPは5段階のレベルに分かれている。(日本ではレベル1～4の4段階が受験可能、レベル1が最も難易度が高い。本学ではレベル4を使用。)このテストはレベル毎にあらかじめ定義された能力基準に従って、個々の受験者の水準を測定することに焦点を合わせたテストである。したがって、学生に適したレベルを選択することで得点が一定区間に固まることを防ぎ、学生の学力差を細かく見ることが可能である。本学でのG-TELP実施にあたってはG-TELP日本事務局の全面的バックアップと、英語担当者全員の協力を得ている。

## 1.2 プレイメントテストとしての G-TELP 活用

一般にプレイメント・テストとして採用されるテストは(1)信頼性、(2)妥当性、(3)客観性、(4)実用性、経済性などの条件を満たす必要があるが、本学では英検、TOEIC、TOEFL、G-TELPなど、いくつかの候補の中から、特に(4)の実用性・経済性を重視して、G-TELPを採用している。G-TELPの採用はオンデマンド方式といって、本学が要求する日時(オリエンテーション期間中)に合わせる事が容易であり、またテスト結果の入手が実施後3日目と迅速で、教務課によるクラス分けに間に合うなどの利点を考慮したものである。しかも受験料も廉価である(団体一括受験の場合、受験生ひとりあたり1500円程度。)

## 1.3 アチーブメントテストとしての G-TELP の活用

本学では英語を第一外国語として選択する学生を対象に、入学時、2年次への進級時(期末試験最終日)、さらに、2年次終了時点(期末試験最終日)の3回受験を義務づけている。アチーブメントテストとしてG-TELPを活用することの利点の一つとして、同一レベル問題を毎回使っているので特定の学生の学力推移が分野別に明確な形で把握できる点をあげることができる。

## 1.4 本学での G-TELP 活用の意義と問題点

本学で、プレイメントテスト並びにアチーブメントテストとして G-TELP を活用してきた意義と問題点は概ね以下のようである。

活用の意義としては、1)受験料が廉価である;2)学生に適したレベルが選べる;3)事後処理が迅速である;4)採点の手間が省ける;5)結果は適度のばらつきがあるのでクラス分けし易い;6)個人に返却されるスコアレポートが詳細で今後の学習の参考になる、などの諸点が上げられる。

逆に問題点としては、1)大学側がいつまで受験料を負担してくれるかについて危惧がある;2)G-TELP 自体の知名度が例えば英検、TOEIC などに比べて低いので、G-TELP を活用することを疑問視する声が学内にある;3)アチーブメントテストとして活用する際(2年次の終了時—3年次にはクラス分けはない)学生に受験させるのが難しく、特に低レベルの学生に受験させるのが、動機づけの点で困難である

## 2 G-TELPの結果を通して見た本学生の英語力についての評価学的所見

### 2.1 各回実施分に関する項目分析(Item Analysis)の結果

(\*以下①=1 回目のテスト、②=2回目のテスト、③=3 回目のテスト、④=4回目のテスト ⑤=5

回目のテストとして表記していくこととする。なお、表中、GRM は grammar(文法) LST は listening(聞き取り) RDG は reading(読解)をそれぞれ表す。

①1999/4/7(1年生)

項目分析(Item Analysis)の結果

	GRM	LST	RDG
テスト項目数	20	20	20
平均点	11.905	8.809	10.764
項目通過率	0.595	0.440	0.538
点双列相関係数	0.415	0.334	0.397
双列相関係数	0.560	0.430	0.505
信頼性係数( $\alpha$ )	0.749	0.591	0.730

②2000/2/9(1年生)

項目分析(Item Analysis)の結果

	GRM	LST	RDG
テスト項目数	20	20	20
平均点	13.636	10.442	10.127
項目通過率	0.682	0.522	0.506
点双列相関係数	0.416	0.347	0.386
双列相関係数	0.585	0.450	0.499
信頼性係数( $\alpha$ )	0.732	0.620	0.704

③2000/4/6(1年生)

項目分析(Item Analysis)の結果

	GRM	LST	RDG
テスト項目数	20	20	20
平均点	13.711	8.855	9.233
項目通過率	0.686	0.443	0.462
点双列相関係数	0.383	0.372	0.383
双列相関係数	0.529	0.480	0.494
信頼性係数( $\alpha$ )	0.705	0.678	0.706

④2001/1/29(1年生+2年生)

項目分析(Item Analysis)の結果

	GRM	LST	RDG
テスト項目数	20	20	20
平均点	14.593	10.754	10.673
項目通過率	0.730	0.538	0.534
点双列相関係数	0.423	0.347	0.399
双列相関係数	0.608	0.455	0.525
信頼性係数( $\alpha$ )	0.754	0.610	0.724

⑤2001/4/6(1年生)

項目分析(Item Analysis)の結果

	GRM	LST	RDG
テスト項目数	20	20	20
平均点	12.773	8.496	8.655
項目通過率	0.639	0.425	0.433
点双列相関係数	0.415	0.334	0.397
双列相関係数	0.560	0.430	0.505
信頼性係数( $\alpha$ )	0.749	0.591	0.730

## 2.2 プレイスメントテストとしての検証

本学では 2.1 に示したように、これまでの5回の G-TELP オンデマンドテストを実施してきたが、そのテスト結果の測定データから、プレイスメントテストとして有効に機能しているかどうかを評価学的観点から検証してみる。

2.1 の項目分析は古典的テスト理論の手法を用いて実施した。主な分析指標に沿ってデータの特徴をまとめると以下ようになる。

まず、テストの難易度を示す項目通過率について見てみると、以下の数値となる。

	GRM	LST	RDG	TTL(G+L+R)
①	0.595	0.440	0.538	0.525
②	0.682	0.522	0.506	0.570
③	0.686	0.443	0.462	0.530
④	0.730	0.538	0.534	0.600
⑤	0.639	0.425	0.433	0.499

G-TELPの出題形式は、各分野とも4肢択一の客観テストである。テスト理論の教えるところでは、一般に多肢選択式テストの最適困難度は以下のように求められる。

$$\text{最適困難度} = 0, 5+0, 5 \times (1/\text{選択肢数})$$

上の式にしたがえば、4肢択一式テストにおける最適困難度は項目通過率が0, 625程度のときとなる。これを目安として上記の結果に照らしてみると、GRMの難易度は受験者にほぼ最適であるが、LST、RDGについてはやや難しかったことがわかる。

これをもう少し掘り下げて検討するために、次に受験者の個々の問題項目に対する正誤と受験者のテスト得点の高低との関係を示す点双列相関係数の値を見てみる。

	GRM	LST	RDG
①	0.415	0.334	0.397
②	0.416	0.347	0.386
③	0.383	0.372	0.383
④	0.423	0.347	0.399
⑤	0.415	0.334	0.397

一般に、テスト得点の高い受験者と低い受験者を各々グループ分けすると、個々の問題項目に対する正答率は、得点の高い受験者グループでは高く、得点の低い受験者グループでは低くなることが予想される。点双列相関係数は、個々の問題項目についてこの相関の強弱が実際どうであったかを示す指標である。通常点双列相関係数の値は0, 200以上が望ましい(0, 400以上は良問)とされている。上記の表が示すとおり、GRMとRDGの点双列相関係数の平均値は常に0, 400前後の極めて高い値が示現している。またLSTの点双列相関係数の平均値も0, 347前後の高い値が示現している。しかし個々にLSTのテスト結果を見ていくと、点双列相関係数が0, 200を下回る設問が、毎回のテストで必ず数題出現しており、必ずしも理想的なデータ測定ができているというわけではない。

また信頼性係数( $\alpha$ )を各セッションで比較しても、LSTの値が他のセッションより低くなる傾向が見受けられるが、LSTにおいては当て推量による応答の影響も予想されるため、この点については確定的な判断を下すことは控えるべきであろうと考察する。

## 結語

以上の分析結果をTTL(G+L+R)で考えた場合、G-TELPレベル4のテストフォームの難易度は本学の受験者の英語力と概ねマッチしており、プレイスメントテストとして十分に機能しているものと推察される。今後は、年次的な学力推移を測定し、本学生の入学時の学力水準を把握することにより、今後の本学の授業内容や英語学力の到達目標を設定していく際の有意義な参考資料となると思われる。よって今後とも入学時学力の推移は注視していく必要があると考えられる。

英語のイントネーションにおける日本人学習者の弱点を克服する法

筑紫女学園大学

谷口雅基

0. 要旨

リアルタイムの視覚フィードバック機能を持つラリングプロセッサーを用い、200人の大学英語学科学学生を対象に行なった英語のイントネーションの Nucleus Placement (核配置) テストの結果により、英語のイントネーションにおける日本人英語学習者の弱点を検討し、その克服法を探る。10の会話を一人一人読ませ、それぞれの会話の最後の行における Nucleus Placement を吟味した。日本人英語学習者の第一の弱点は、ピッチ幅のせまさである。ほとんどの学生が200Hz~250Hz というせまいピッチ幅を示した。しかし、これは tone, tonality, tonicity ほど重要なことではない。第二に、文や Word Group の最後の語に Nucleus (核) をおくことが多く、それが旧情報であっても文や Word Group の最後の語にあれば Nucleus をおく傾向が強い。第三に、日本語のイントネーションの影響を強く受けている。新情報に Nucleus をおくことをよく理解し、またその新情報の語や音節の位置を正しく把握できたとしても、Nucleus Placement の方法が日本語のイントネーションによる方法であれば、英語のイントネーションにおいては Nucleus Placement と受け取れないことがある。多くの被験者が新情報のある語や音節に High Level Pitch を用いた。High Level Pitch を用いることは日本語のイントネーションにおいては新情報を強調する方法であるかも知れないが、英語では必ずしもそうではない。英語と日本語のイントネーションにおける新情報の示し方の相違のため、多くの学生が正しい英語の Nucleus Placement ができなかつたと言える。日本語のイントネーションにとらわれず、英語のイントネーションを習得するよう指導する必要がある。その為の有効な方法には

- (1) 英語の Intonation を平易に学習できるよう説き豊富な練習材料を与えている O'Connor and Arnold: *Intonation of Colloquial English* (1973) にある7つの核調子を用いて指導すること
- (2) 旧情報と新情報の区別を意識させること
- (3) 日本語の Intonation の特徴を認識させ、日本語と英語の Intonation の相違を意識させること

などが考えられる。

1. はじめに

本発表は、日本人英語学習者の英語のイントネーション教育向上の為に筆者が行なっている研究に基づいている。リアルタイムの視覚フィードバック機能を持つラリングプロセッサーを用い、コンピューター画面上に話者の基本周波数、すなわち話者のピッチをリアルタイムで表示することによって行なった実験を通して、日本人英語学習者の英語のイントネーションにおける三つの弱点を論じ、その克服法を探る。

2. 被験者、実験文、方法

「英語音声学」科目を受講したことのある200名の学生に以下に示す10の会話を発話させ、ラリングプロセッサーで分析した。10の会話は以下の通りである。それぞれの会話の最終行における正しい核音節をイタリックにしてある。

- (1) A: Is this your first visit to Japan?

- B: No, this is my *second* visit here.
- (2) A: I am eighteen.  
B: I thought you were *nineteen*.
- (3) A: Shall we meet at 3:30?  
B: Let's make it *four* thirty.
- (4) A: He came to Japan in 1989.  
B: Then he came again in nineteen *ninety-nine*.
- (5) A: She is a very good actress?  
B: She is an *excellent* actress.
- (6) A: Did she win the Silver Medal?  
B: She won the *Gold* Medal.
- (7) A: Did it rain this morning?  
B: Yes, it did.  
A: I *thought* it would.
- (8) A: Would you like some coffee?  
B: No, thank you.  
A: I thought you *would*.
- (9) A: Do you export beer?  
B: No, we *import* beer.
- (10) A: Did she thank you?  
B: I thanked *her*.

### 3. 結果

#### 3. 1. 狭いピッチ幅

日本人の英語のイントネーションにおける弱点の一つでまづ気がつくのは、ピッチ幅の狭さである。大多数の被験者のピッチ幅は200から250ヘルツであった。これよりも狭い者もあった。中には200から300ヘルツ程の幅を用いる者もいたが、それよりも大きいピッチ幅を用いる者は稀であった。しかしピッチ幅の狭さは大きな問題ではない。もっと重要なことはトーン、トニシティ、トナリティである。

#### 3. 2. 旧情報に“Accent”をおく

ラリソグプロセッサ実験によって観察された日本人の英語のイントネーションにおける二つ目の弱点は、旧情報に“Accent”をおくことである。言いかえれば、旧情報を“Deaccent”しないことである。英語においては、旧情報を“Deaccent”することが自然であり、“Deaccent”されていなければ新情報として受け取られる、旧情報と新情報の混同として奇異な感じを聞き手に与える、または誤解を生じる可能性がある。本実験においては、それぞれの会話の最後の発話を分析し、被験者が会話のコンテキストをいかに考慮に入れるかを観察した。

次のスクリプトにおいては、大多数の被験者が核をおいた音節に下線を施した。

- (1) A: Is this your first visit to Japan?  
B: No, this is my second visit here.
- (2) A: I am eighteen.  
B: I thought you were nineteen.
- (3) A: Shall we meet at 3:30?

- B: Let's make it four thirty.
- (4) A: He came to Japan in 1989.  
B: Then he came again in nineteen ninety-nine.
- (5) A: She is a very good actress?  
B: She is an excellent actress.
- (6) A: Did she win the Silver Medal?  
B: She won the Gold Medal.
- (7) A: Did it rain this morning?  
B: Yes, it did.  
A: I thought it would.
- (8) A: Would you like some coffee?  
B: No, thank you.  
A: I thought you would.
- (9) A: Do you export beer?  
B: No, we import beer.
- (10) A: Did she thank you?  
B: I thanked her.

下表に示すように、日本人学習者は各発話の最後の語の語強勢音節に核をおく傾向を持つ。このことは大多数の被験者が発話のコンテキストを考慮に入れていなかったか、入れていても旧情報を“Deaccent”しなかったといえる。それは日本語では旧情報を必ずしも“Deaccent”しないことの影響であるかも知れない。会話（8）においては、最後の語がたまたま正しい核の位置であり、大多数の被験者が正しい核配置に成功したが、これは被験者がそれを正しいと認識していたことを意味しない。なぜなら、同じ大多数の被験者が会話（7）においても最後の語に核をおいたからであり、その核配置はまちがっているからである。ほとんどの被験者はコンテキストの相違に関わりなく、最後の語に核をおく傾向を示した。

### 3. 3. 日本語のイントネーションの介入

しかし日本人英語学習者がコンテキストを考慮に入れたとしても、それが必ずしも英語のイントネーションにおける正しい核配置につながらないようである。これは日本語と英語の“Accentuation”の仕方、イントネーションにおける情報のフォーカスの仕方の相違にあるようである。上記の下線部音節において、大多数の被験者が高下降調か低下降調のトーンを用いたが、同時に大多数の被験者の発話の中に観察された大きな特徴は、英語のネイティブスピーカーであれば核をおくであろう音節を含む語や語句に“high level pitch”すなわち「高い平坦調のピッチ」をおいたことである。この「高い平坦調のピッチ」は日本語のイントネーションにおける新情報の伝え方であるのかも知れない。このことは、英語のネイティブスピーカーによって日本人の核配置がまちがっているように聞こえる理由の一つは、日本語のイントネーションにおける新情報の伝え方が日本人英語のイントネーションに介入していることであるかもしれない。

次のスクリプトにおけるイタリック部分は、大多数の被験者が「高い平坦調のピッチ」を用いた音節である。

- (1) A: Is this your first visit to Japan?  
B: No, this is my *second* visit here.

- (2) A: I am eighteen.  
B: I thought you were nineteen.
- (3) A: Shall we meet at 3:30?  
B: Let's make it *four* thirty.
- (4) A: He came to Japan in 1989.  
B: Then he came again in nineteen ninety-nine.
- (5) A: She is a very good actress?  
B: She is an *excellent* actress.
- (6) A: Did she win the Silver Medal?  
B: She won the *Gold* Medal.
- (7) A: Did it rain this morning?  
B: Yes, it did.  
A: I thought it would.
- (8) A: Would you like some coffee?  
B: No, thank you.  
A: I thought you would.
- (9) A: Do you export beer?  
B: No, we *import* beer.
- (10) A: Did she thank you?  
B: I *thanked* her.

イタリック部分の音節に「高い平坦調のピッチ」を用いた被験者は、旧情報と新情報を認識していたかもしれず、またその新情報を強調しようとしていたのかもしれないが、その強調の仕方が日本語のイントネーションにおける仕方であったと言えるのかもしれない。このことは、上記の会話(1)、(3)、(5)、(6)、(9)において言える。

会話(1)における正しい核は“second”の第一音節であり、被験者の78.5%が“second”全体に「高い平坦調のピッチ」をおいた。会話(3)における正しい核は“four”であり、77%の被験者が“four”に「高い平坦調のピッチ」をおいた。会話(5)における正しい核は“excellent”の第一音節であり、63%の被験者が“excellent”全体に「高い平坦調のピッチ」をおいた。会話(6)における正しい核は“Gold”であり、78%の被験者が“Gold”に「高い平坦調のピッチ」をおいた。会話(9)における正しい核は“import”の第一音節であり、11%の被験者が“import”全体に「高い平坦調のピッチ」をおき、66%の被験者が“import”の第二音節に「高い平坦調のピッチ」をおいた。“import”の例で観察されることには、被験者の大多数は、語強勢の位置が対照強勢によって移動することが可能であることを知らなかったようである。

被験者の大多数がそれぞれの発話の最後の語の第一語強勢音節に核をおいているように聞こえたが、被験者の意図はそうではなかったのかもしれない。大多数の被験者は正しい核配置を意図していたにも関わらず、その方法が間違っていただけなのかもしれない。その間違った方法とは「高い平坦調のピッチ」の使用である。もしそうであれば日本人学習者が新情報にフォーカスを当てる方法は、日本語のイントネーションの介入を強く受けているということが言える。英語学習者はO'Connor and Arnold (1973)にある7つの核調子を用いるよう指導されることによって、日本語のイントネーションの介入を避けることができ、英語のネイティブスピーカーに誤解されない英語のイントネーションを習得できるものとする。

Taniguchi (2000b) は複合語に焦点を当て、日本語のイントネーションが日本人英語学習者の英

語のイントネーションに介入することを探ったが、この介入は複合語のみならず発話のあらゆる部分に観察されるであろう。特に核配置に関しては、英語と日本語の新情報の知らせ方の相違により、このことが顕著に観察されるようである。

#### 4. 実験データ

次の表は本実験の数値データである。各発話における音節や語に Nucleus (核) および High Level Pitch (「高い平坦調のピッチ」) を用いた被験者数の実数である。

表：日本人英語学習者の英語のイントネーションにおける核配置と「高い平坦調のピッチ」使用

数値は全体数200のうちの実数										
(1) A: Is this your first visit to Japan?										
B:	No,	this	is	my	sec	ond	vis	it	here	
Nucleus	2				23		2			178
High Level Pitch					157					
High Level Pitch					7					
(2) A: I am eighteen.										
B:	I	thought	you	were	nine	teen				
Nucleus	7	3	8		85	117				
High Level Pitch		1			2					
(3) A: Shall we meet at 3:30?										
B:	Let's	make	it	four	thirt	y				
Nucleus				26	169	4				
High Level Pitch				154						
(4) A: He came to Japan in 1989.										
B:	Then	he	came	again	in	nine	teen	ninet	y	nine
Nucleus							2	16		182
High Level Pitch						3		13		
(5) A: She is a very good actress?										
B:	She	is	an	exc	el	lent	ac	tress		
Nucleus				66			149			
High Level Pitch				126						
(6) A: Did she win the Silver Medal?										
B:	She	won	the	Gold	Med	al				
Nucleus				37	164	2				
High Level Pitch				156						
(7) A: Did it rain this morning?										
B:	Yes, it did.									
A:	I	thought	it	would						
Nucleus	27	9		195						
High Level Pitch	13	67								

(8) A: Would you like some coffee?									
B: No, thank you.									
A:	I	thought	you	would					
Nucleus	29	8	6	194					
High Level Pitch	10	66							
(9) A: Do you export beer?									
B:	No,	we	im	port	beer				
Nucleus	26		24	18	160				
High Level Pitch				132					
High Level Pitch			22						
(10) A: Did she thank you?									
B:	I	thanked	her						
Nucleus	24	26	160						
High Level Pitch	3	141							

#### 5. 日本人学習者の英語のイントネーションの弱点を克服する法

日本人学習者の英語のイントネーションの弱点を克服するには、日本語のイントネーションにとらわれず、英語のイントネーションを習得するよう指導する必要がある。その為の効果的な方法には

- (1) 英語のイントネーションを平易に学習できるよう説き豊富な練習材料を与えている O'Connor and Arnold: *Intonation of Colloquial English* (1973) にある7つの核調子を用いて指導すること。
- (2) 旧情報と新情報の区別を意識させること、例えば、上記の実験に用いられた10の会話のような会話例を材料として練習させること。
- (3) 日本語のイントネーションの特徴を認識させ、日本語と英語のイントネーションの相違を意識させること。このためには、上記のような練習用につくられた会話のみならず、映画等において用いられている英語、すなわち英語学習用として意図してつくられたものではない自然な英語のイントネーションを多く聞かせ、練習させること。

などが考えられるが、さらなる研究を要する。

#### 6. 参考文献

- Abberton, E. and Fourcin, A. J. (1975a) "Visual feedback and the acquisition of intonation" in Lenneberg and Lenneberg (eds) *Foundations of Language Development: A Multi-disciplinary Approach*. London: Academic Press.
- ..... (1975b) *American English Intonation: Audio-Visual Practice Materials*, textbook and tapes. London: Linguaphone.
- Abberton, E., Fourcin, A. J. and Miller, D. (1994) "Using pc-based interactive visual displays for teaching and learning intonation" *Language Centre* 5:5-6.
- Allen, W. S. (1954) *Living English Speech*. London: Longman.

- Bradford, B. (1988) *Intonation in Context*. Cambridge: CUP.
- Taniguchi, M. (1997a) "A Pilot Study for Research on Improving the Teaching of English Intonation to Japanese Learners of English" *Journal of Chikushi Jogakuen University*. No. 9 (151-169).
- Taniguchi, M. (1997b) "A Study of the Effect of Interactive Visual Feedback on Improving the Intonation of Japanese EFL Learners" in M. Tsuzuki (ed) *English Phonetics*.
- Taniguchi, M. (1997c) "Effect of Interactive Visual Feedback on the Improvement of English Intonation of Japanese EFL Learners" *Bulletin of the International Cultural Research Institute of Chikushi Jogakuen University/Junior College*, No.8.
- Taniguchi, M. (1998a) "Appendix to "Effect of Interactive Visual Feedback on the Improvement of English Intonation of Japanese EFL Learners": Material 1" *Journal of Chikushi Jogakuen University*. No. 10.
- Taniguchi, M. (1998b) "Appendix to "Effect of Interactive Visual Feedback on the Improvement of English Intonation of Japanese EFL Learners": Material 2" *Bulletin of the International Cultural Research Institute of Chikushi Jogakuen University / Junior College*, No. 9
- Taniguchi, M. (1999a) "Appendix to "Effect of Interactive Visual Feedback on the Improvement of English Intonation of Japanese EFL Learners": Material 3" *Journal of Chikushi Jogakuen University*. No. 11.
- Taniguchi, M. (1999b) "Appendix to "Effect of Interactive Visual Feedback on the Improvement of English Intonation of Japanese EFL Learners": Material 4" *Bulletin of the International Cultural Research Institute of Chikushi Jogakuen University / Junior College*, No. 10
- Taniguchi, M. & Abberton, E. (1999c) "Effect of Interactive Visual Feedback on the Improvement of English Intonation of Japanese EFL Learners" *Speech, Hearing and Language: Work in Progress*, 11. The Department of Phonetics and Linguistics, University College London.
- Taniguchi, M. (2000a) "Characteristic Features of Japanese EFL Learners' English Intonation: How Interactive Visual Feedback can Help to Improve" in M. Tsuzuki (ed) *English Phonetics* No. 3.
- Taniguchi, M. (2000b) "Analysis of Japanese EFL Learners' English Intonation: Japanese and English Compounds" *Bulletin of the International Cultural Research Institute of Chikushi Jogakuen University / Junior College*, No. 11.
- Taniguchi, M. (2001) "Japanese EFL Learners' Weak Points in English Intonation" in M. Tsuzuki (ed) *English Phonetics* No. 4.
- Well, J. C. (1990) *Longman Pronunciation Dictionary*. Harlow: Longman.
- Well, J. C. (2000a) *Longman Pronunciation Dictionary*, 2<sup>nd</sup> ed London: Pearson Education.
- Well, J. C. (2000b) "Overcoming phonetic interference" in M. Tsuzuki (ed) *English Phonetics* No. 3.

## 佐賀大学における朝鮮（韓国）語教育

佐賀大学講師 永島 広紀

### はじめに

平成 14 年度大学入試センター試験の外国語科目として新たに加わる「韓国語」に象徴されるように、我が国でも遅ればせながら大学・高校における外国語教育の一環として市民権を持ちつつある朝鮮・韓国語である。今後の大学改革の趨勢を念頭に置きつつ、単なる「外国語科目」としての教授にとどまらない、それなりの実用面にも配慮した教育カリキュラムが大学教育においても模索される時、地理的に近接し、市民レベルの交流実績も豊富である九州地域が東アジア、就中、中国・韓国との関係にある程度特化されていくとすると、社会のニーズとしてもまずはコミュニケーションの手段としてのそれに向かわざるを得ないだろう。しかし、大学における伝統的な「教養主義／教養教育」という大前提が掲げられるとき、そこには自ずから齟齬をきたしかねない要素も少なからず存する。以下に佐賀大における朝鮮（韓国）語教育の現状を紹介し、その発展の可能性を探りつつも、同時に問題点にも迫らんとするのが本報告のささやかな試みである。

### 「全学教育」における取り組み

従来、非常勤講師（1名）のみによる細々とした講義が行われていたが、専任教官の着任にともない平成 11 年度入学生から「全学教育科目」の第一外国語としても履修できるように履修細則が改訂され、現在は専任 2・非常勤 1（全学教育担当分）のスタッフにて開講している。開講科目名は「朝鮮語Ⅰ」「朝鮮語Ⅱ」「朝鮮語Ⅲ」となっている。「Ⅰ」ではハングルの構造から発音規則、基本的な文型・文法が比較的薄目の教科書を利用して教授され、「Ⅱ」においては中級レベルの込み入った文法規則の説明とともに、順次会話表現を身につけさせていくことを目標としている（「Ⅲ」は学年進行の都合で未開講）。毎年の受講生数は平均 30～40 名程度であり、他の外国語科目に比すると絶対数は少ないものの、その受講の動機付けに関しては、高校の修学旅行で韓国を訪れたり、地域における韓国との国際交流に参加したなど、それなりに積極的な理由を挙げる学生が多い。昨今のやや軽薄な旅行・グルメに関するテレビ番組の影響も、韓国に関する具体的なイメージ定着に関してはそれなりの貢献をしてくれているようでもある。

また、大学間／学部間交流協定締結校（全南大・国民大・安東大・木浦大・済州大・釜山大・釜慶大）との連絡強化を留学生課（留学生センター）との連携の下に図っており、平成 11 年度からの 2 年間で韓国・釜山の 3 ヶ校において延べ 5 回の語学研修（3～4 週間）を実施している。渡航に際して交通の利便性・簡便性が高い釜山（韓国第二の都市）での語学研修実施は首都・ソウルとはまた違った風情があり、かつ比較的低廉な費用にて実施できるのが大きな魅力である。また韓国の地方大学も国際交流に力を注ぎつつあり、先方の受け入れ態勢も年ごとに整いつつある。

なお、語学研修参加者には他の外国語同様に全学教育科目としての単位認定（主として「朝鮮

語Ⅱ)を行っている。今後は各種外国語検定試験の単位化などが検討課題としてあがっている。

#### 学部専門教育

従来の教育学部・ゼロ免課程においても韓国での実地研修が必修単位化されており、それなりの交流実績を挙げていたが、本格的に語学を含めた専門教育を実施できるようになったのは教養部との合体改組後の「文化教育学部・国際文化課程」においてである。ここでは全学教育とは別個に「専門外国語」科目の履修を義務づけており、13年度より「朝鮮語」(10単位)も追加されたが、初年度の正規履修者は僅かに1名を数えるに止まった。これに関しては入学時のオリエンテーション時での周知によって今後は改善していくものと考えられる。

また、同年度から「3年次編入生」入試(一般)においても外国語試験に「朝鮮語」が追加され、短期大学等にて朝鮮(韓国)語を履修した受験生に朝鮮語での受験の道が開かれた。ただし、中国朝鮮族の母国語をどう判断するかなど検討事項は多い。

現在、同学部には朝鮮・韓国をフィールドとする歴史学・政治学・経済学のプロパーが在職しており、こうした人文・社会科学の学問を下支えする語学力の訓練においては、条件が整いつつある。その意味において個別の専門教育と融合しうるカリキュラムとなっている。とはいえ羊頭狗肉にならないためのたゆまざる創意工夫と努力が必要なことは言うまでもない。

#### 結びにかえて

佐賀大においては言わば「入り口」の整備がほぼ終わり、次なる「送り出し」の段階に向けた時期を迎えつつある。しかしながら、いまだ朝鮮語教育に関する学生への周知は徹底されておらず、まずは「需要」の掘り起こしが急務である。特に全学教育の外国語は週1回の講義であり、実践的な語学力を身につけさせるには、やはり海外語学研修との有機的な結合なくしては目標達成が難しい。反面、朝鮮語の場合は渡航費用も割安であり、協定校の協力により滞在費なども最小限の出費で可能となっている。とはいえ、安直な国際交流に墮することなく、大学生としての一般常識を培った上での真の交流実現こそが大学における語学教育の真髄ではなからうか。畢竟、正確な日本語駆使能力、あるいは言葉に対する感性を抜きにして外国語の習得は万全たりえない。その意味で、筆者は無条件に戦前の教育を賞賛するものではないが、それでもとりわけ旧制の高等学校における外国語教育の理念とその実施方法には見るべきものも多く、そこに当世流の「実用」面をいかに組み入れていけるかが今後の教養教育においても検討されるべきではなからうか。

## 外国語部会報告

佐賀大学教授 米澤 充

外国語分科会では、8本の研究報告が集まり、参加者も1日目が50名近く、2日目が30名余りあって、準備段階でも当日の進行も順調であったことは部会を引き受けた私には誠に幸いであった。この点でまず発表された方々と参加なさった方々にお礼申し上げねばならない。

大学での外国語科目は既習の英語と初習のその他の外国語に分けることができ、それに応じて直面している問題は当然異なっている。筆者自身はドイツ語担当なので予断が入り込んだ意見であることを許していただけるなら、英語に関して現在求められていることば、いわゆる「実用化」というタームで表現できるであろう。事の善し悪しの判断は暫く措くとして、その背景には国際的レベルでの英語環境の大規模な変化ということがあることは一般に認められるとしてよからう。それは、根本の所では従来型の教養的英語を否定するものではなかろうが、個々の学習者のニーズに合わせて社会生活と個人生活の両方で「使える英語」を授業の中であるいは授業以外のところで体得させ得るかどうかに関わってくる割り合いが飛躍的に高く求められて来ているということの意味するだろう。今日「個性化」とか「高度化」とか「国際化」とかのお呪いのような言葉で表現されることが多いが、種々の制約の中でなお何らかの解決によって達成することが、大学での英語教育にますます求められて行くと大略言えるだろう。それに関連していろいろな改革の試みがなされていることが仄聞される。TOEFLなどの外的基準と授業とのリンクもかなり行われているようである。また単位や履修時間の弾力化など制度的な面の改善に及ぶこともあろう。

報告の詳細はそれぞれの要約をお読み頂きたいが、竹内先生（鹿大）の「ネットワークを利用した英語教育システム」は教室の枠を越えた自学自習のシステム化を提供することを目指し、木下・富岡両先生（福国大）の報告は「国際英検」をクラス分けや到達目標設定に利用する試みであり、谷口先生（筑女大）はラリンゴプロセッサーによる英語イントネーションの弱点克服を実証するものであった。どれも新しい工夫に満ちた、示唆するところ多い発表であった。

初習外国語については、設置基準の大綱化以降の急変した事態へに対しさまざまな問い直しや種々の工夫によって対応・解決が試みられている。一方で単位数や時間数の相当な減少やさらには単位の非必修化などの事態があり、他方では、開講言語の多様化・学習者の数的な変移などの状況の中で、なお大学入学後に未知の言語に新たに出会うことで、英語による以外の言語思考・文化圏を知り、世界の文化現象を複眼的視野で捉える経験を蓄積することの意義は倦むことなく主張されるべきであろう。大まかではあるが授業アンケートで見ると、学生からの肯定的反応は初習外国語の意義の一応の証左である。理念と現実とのギャップに直面しつつも、学生の学習意欲に訴えかけ、モチベーションを高める工夫は常に求められる。山村先生（九大）の問題提起は外国語の種類が多様化とクラス規模の適正化に関するものであり、吉井先生（琉大）は通常の授業形態とは別に「短期集中型」によって学習効果を高める試みを示唆なさり、永島先生（佐大）の報告は短期語学研修などを通じて学生のモチベーションを高めることを通して、比較的

新しく参入した韓国語の位置づけを確かなものにするという意図を窺わせるものであった。

大学での外国語教育に求められるものは時勢と共に変化し、それに応じて一段と様変わりした  
いろいろの問題点が浮かび上がり、より具体的な解決や是正あるいは変革が意識されつつあると  
いえる。それゆえにこそ、それぞれの現場での経験や知見の交換・交流は、なんらかの実り或い  
はそれへの手掛かりを与える機会となったであろうし、これからもなりうると言ってよいだろう。

## 健康・スポーツ科目の学生による授業評価について

佐賀大学 保健体育部会 江崎利昭

### 1、授業評価アンケートの内容と方法

アンケートは、平成12年度前学期（6～7月）に実施された。内容は、1）受講学生の受講態度に関するもの、2）教官の授業方法等に関するもの、3）教官の対応・態度に関するもの、4）教材・視聴覚機器の使用に関するもの、の4つのカテゴリーに分け、合計15の設問と自由記入欄で構成した。回答は4つの選択肢（悪い・やや悪い・やや良い・良い）から一つを選ぶ無記名式で行った。クラス実施率とアンケート回答者率は、全体で各92.9%と64.5%であった。

### 2、授業評価アンケートの結果と分析

学生の出席率・学習態度は講義・演習とスポーツ実習とも良く、必修科目としての影響が見られる。但し、予習と復習の実施では否定的な回答が多く、講義・演習ではとくに積極的に学習させる工夫が必要であろう。授業の組み立てとしての授業構成の仕方・説明の仕方・授業の進め具合は、講義・演習とスポーツ実習とも80%以上の者が肯定的な回答をしている。シラバスの利用者が少ないのは、授業の第1週目に内容について担当者から直接説明がなされた後、コース分けしているためと思われる。授業の技術としての声の大小・話すスピード・明瞭さは、90%以上の者が良いという肯定的な回答をしている反面、板書の仕方では講義・演習で否定的あるいは消極的な回答が多い。再考すべきであろう。授業での教員の質問への回答・情熱・公平な対応・信頼感については、講義・演習とスポーツ実習いずれも85～95%の者が肯定的な回答をしている。授業効果を高める手段としての教材の利用・配布資料の内容・視聴覚機器の使用は、講義・演習ではいずれも肯定的な回答が50%強で、無回答の者も相当数見られる。一層の工夫・改善の必要であろう。スポーツ実習ではいずれも無回答の者が多いが、これは設問としてそぐわない点もあるが、スポーツ実習では教材イコール用具ともいえ最低限準備されており、実習の特性として口頭による説明、身体による模範演技が主となるために予期される結果といえよう。

自由記述は多種多様な内容のものが記述されていた。その多くは講義・演習とスポーツ実習いずれにおいても概ね好評な意見が多く見られた。反面、専門的すぎて分からないことがある・シラバス通りの内容でない・講義の内容を体感的に理解したい・実践を生かした授業方法・やる気を評価する、など授業方法への要望や評価の方法について鋭い指摘があった。今後とも、教員個人のFDを高めていく努力が重要であろう。また、体育施設の充実を求める声も多かった。さらに、雨天時の授業方法や1校時のスポーツ実習開講の解消も考えなければならない課題である。

### 3、学生による授業評価の意味と課題

各教員個人で行われる授業評価の有効性あるいはこの種の公の調査がなおざりになりやすいことがあるにしても、学生による授業評価の実施は、授業の閉鎖性を防ぐとともに、学生の学習環境を改善し学生全体の授業理解度等の向上を図るためには重要であり、組織的なシステムとして定着させることが必要であろう。そのためには、例えば、実施組織と手続きのシステム化、授業評価の結果を短時間で教員にフィードバックすること、科目に対応した設問内容の工夫等の課題がある。

## 長崎県立大学における体育実技の現状と課題

長崎県立大学 西村千尋

### I. はじめに

長崎県立大学においては、1997年3月から大学の将来構想について着手し、1999年5月に「長崎県立大学将来構想」を策定した。保健体育科目においても、さらに充実した教育を目指すため、カリキュラムの見直しを積極的に行ってきた。しかし、本学においても大学を取り巻く環境が厳しいことも影響して、本学および体育教員の目指すカリキュラムの実現には困難を極め、結果として変質を余儀なくされているのが現状である。そこで、本論では、これまでのカリキュラム改革の検討過程において、問題となった事項に関し紹介するものである。

### II. 現 状

#### 1. 教育目標

高齢化社会の到来や余暇時間の増大する中で、健康・体力作りや生きがい対策にスポーツが持つ機能が重要視されてきている。このため、自己のライフステージや心身の状態に適したスポーツを生活の中に取り入れ、豊かなライフスタイルを形成できる能力の獲得が求められている。そこで、それぞれのスポーツ種目を通して楽しさや喜びを味わいながら、スポーツの理論と技術の習得をはかり、あわせて学生生活および生涯にわたっての健康の保持増進に有用な能力の獲得をはかることを教育の目標としている。

#### 2. 構 成

科目は講義2単位と実技2単位で構成されており、いずれも必修科目である。講義に関しては体育講義1単位と保健理論1単位からなっており、1年次にそれぞれ所属する学科で開講されている講義を履修する。実技においては、毎週2時間30週をもって1単位とし、2年間履修する。原則として、1年間に2つの開設科目を受講することはできない。

#### 3. 体育実技

学科・学年の枠に関わらず、学生が自由に時間割上開設されているスポーツ種目から選択できる。表1に示すように、開設されている体育実技24コース(A1～M1)から学生自身が自分の選択したいスポーツ種目の組み合わせを考え、ひとつを選択する。種目群としてA群(ボールゲーム)、B群(ラケットスポーツ)、さらに生涯スポーツへの導入も考慮しC群(ニュースポーツ)も採用し、2年間のうちにA・B・Cのすべての群を履修する。ただし、いくつかのコースは各群共通として扱うことができるよう配慮している。

また、平成12年度よりウォーキングやシーカヤックを中心としたマリンスポーツを採用し、その目標として心身への効果だけでなく西海国立公園を有する地域環境の再認識や環境問題への意識付けなどを旨とした自然体験型学習となるよう指導計画をたて実施している。

表 1. 授業名と開設スポーツ種目

授業名	種目 (前期・後期)	群	授業名	種目 (前期・後期)	群
A 1	バドミントン・サッカー	BA	A 2	テニス・バスケットボール	BA
B 1	ソフトバレーボール・サッカー	CA	B 2	テニス・バスケットボール	BA
C 1	ウォーキング・フィットネス	共通	C 2	インディアカ・テニス	CB
D 1	バードゴルフ・バスケットボール	CA	D 2	ソフトバレーボール・サッカー	CA
E 1	バードゴルフ・バスケットボール	CA	E 2	卓球・サッカー	BA
F 1	ソフトボール・卓球	AB	F 2	ソフトバレーボール・ソフトテニス	CB
G 1	フリスビー・バドミントン	CB	G 2	インディアカ・ソフトテニス	CB
H 1	フリスビー・バドミントン	CB	H 2	インディアカ・テニス	CB
I 1	バレーボール・テニス	AB	I 2	ソフトボール・ソフトバレーボール	AC
J 1	バレーボール・テニス	AB	J 2	ソフトボール・インディアカ	AC
K 1	ゴルフ*	共通			
L 1	スキー*	共通			
M 1	マリン (シーカヤック) *	共通			

A : A群 (ボールゲーム) B : B群 (ラケットスポーツ) C : C群 (ニュースポーツ) \*は夏季または冬季集中

### Ⅲ. 改革の経緯

#### 1. 新学部構想 (長崎県立大学将来構想最終報告書, 1999年)

新学部の名称は法情報学部であり、法政策学科と国際コミュニケーション学科からなる2つの学科から構成される。このうち、国際コミュニケーション学科に、基礎演習科目として「健康とスポーツ」「健康と栄養」、専門基礎科目群に「スポーツ環境論Ⅰ」、専門科目群に「スポーツ環境論Ⅱ」を配置した。

一方、全学共通科目における健康スポーツ科目では、実技科目として、「スポーツⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」(30週1単位)を、理論科目として「健康スポーツ理論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を配置した。これらは、1年次から4年次にかけて配置され、理論1科目2単位と実技科目2科目2単位計3科目4単位を必修とする案であった。なお、実技科目においては安全性や効果の点を考慮し、1クラス30名をもって上限とした。また、卒業単位に算入できる選択科目の上限は、実技2科目2単位または理論1科目2単位までとした。

これに対し、設置者はまず既存学部の充実を図るべきとの回答を寄せ、新学部構想は見送りとなった。

#### 2. 新学科構想

その後、新学科構想案が私案として提出されたが、前述したように「既存学部学科の範囲内における再編・充実」しか認められないため見直しを余儀なくされた。

#### 3. 新コース構想

そこで、次に検討されたのがコース制であり、経済・流通の両学科間に設置される人間科学コースである。コース内に、コースコア科目およびコース関連科目として「健康学概論」「健康政策論」「スポーツ生理学」「公衆衛生学」「スポーツ医学」「スポーツ心理学」「医療と福祉」を、全学教養教育科目として「生涯スポーツ」を必修2単位(30週1単位)で配置した。

これに対し設置者は、大学から提案を受けている既存学部の充実策については、問題点があることから、再検討を要するとの回答を行っている。

#### 4. 新カリキュラム案（長崎県立大学の既存学部充実，2001年6月）

コース制への参入も否定されたため、全学教育科目においては体育科目「生涯スポーツ」必修2単位（30週1単位）を配置し、講義科目「健康科学理論」は一般教育科目自然科学分野に配置替えを行った。なお、検討の過程で経済学科の地域・公共政策コースに「健康政策論」を提案したが、拒否された。したがって、その後の議論は、全学教育科目にける体育科目「生涯スポーツ」と一般教育科目自然科学分野に移設した講義科目「健康科学理論」に集中することとなる。その中で、設置者が強硬に要求してきたことは Semester 化の徹底であり、30週1単位は認められないという姿勢であった。

#### 5. 最終結論

紆余曲折を経て達した最終結論は、カリキュラム改革案全体の否定を免れるため、結局のところ Semester 化の徹底に応じることとなった。したがって、体育実技は半期（15週）1単位、2単位を必修とし、1年間履修もしくは集中コースの履修のみでも可となった。

### IV. 今後の課題

ようやく新カリキュラムの形態が明確になったわけであるが、体育教員の目指すものとは大幅に異なる結果となった。多くの学生の健康管理や体力の維持向上に寄与することは難しい形となり、1年間で教育効果をあげるためにどのような形をとるか早急に検討しなくてはならない。つまり、30週1単位の実技では、実技・講義融合型をとり、学生自身の身体的・心理的なデータをもとにレポート作成等を盛り込むことにより教育効果を上げることを目指していた。しかし、15週1単位となったことにより、この形式が実施可能であるか再度検討する必要がある。

### V. 結 語

設置者である県との交渉の中で、大学側は30週1単位で2単位必修（2年間履修）の体育実技は本学の新カリキュラムの目玉のひとつであると主張し続けた。しかし、前述したように、Semester 化の徹底を求める設置者により、体育教員の考える体育実技が大きく変わらざるを得なかったことを伝えておきたい。

九州大学における体育教育の位置づけと課題

九州大学講師 高柳 茂美

健康・スポーツ科学科目の概要

(1) 開講内容と開講時期

健康・スポーツ科学科目は、全学生を対象とした必修科目としての「健康・スポーツ科学科目」と選択科目としての「健康・スポーツ科学科目」とからなる。その内容と開講時期を表1に示す。

表1 健康・スポーツ科学科目

科目区分	科目名称	単位数	1年		2年		3年		4年	
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
健康・スポーツ科学科目Ⅰ	健康・スポーツ科学講義	2	(●)	(●)						
	健康・スポーツ科学実習	1	●							
健康・スポーツ科学科目Ⅱ	身体運動実習Ⅰ	1		○						
	身体運動実習Ⅱ	1			○					
	身体運動の科学(講義)	2			○					
	生涯スポーツ実習Ⅰ	1				○		○		○
	生涯スポーツ実習Ⅱ	1					○		○	
	生涯スポーツ論(講義)	2					○		○	

●必修(講義は、時間割の都合上、前期または後期の受講となる) ○選択

(2) 健康・スポーツ科学科目(必修科目)の内容

講義と実習の連携により知的理解と体験的理解の双方を深めることを目的としている。

(1) 健康・スポーツ科学講義

健康・スポーツ科学実習と有機的連携を図りつつ、健康を疾病の対立概念としてではなく、個人の生き方をも含めた概念として捉え、現代生活における健康の意義について、身体的、心理的、社会的な側面から講義する。さらには、本学学生の体力の現状から、青少年の身体や体力をめぐる諸問題を明らかにし、それに及ぼす身体運動の効果について講義する。

(2) 健康・スポーツ科学実習

健康・体力づくりに関する基礎的な理解と、その実践方法を通して、生涯にわたる積極的な健康・体力づくりのための資質を養わせることを目的とする。特に、現在の健康問題の焦点となっている有酸素運動の意義と実践方法の理解及び体力づくりのためのトレーニングの原理と方法の習得が中心的な内容となる。また、栄養・食事、休養、ストレス解消、さらに健康のための基礎的生活習慣などに関する教育も行う。

### (3) 健康・スポーツ科学科目（選択科目）の内容

#### (1) 身体運動実習

スポーツを含めた多様な身体運動力人間の「からだ」や「こころ」にどのような働きかけをするのかを体感し、運動やスポーツを通じて、健康の自己管理の意義と実際について学ぶことを目的とする。平成13年度の開講科目は、バスケットボール、ソフトボール、バドミントン、サッカー、ソフトボール、テニス、マルチスポーツ、卓球、ボールゲーム、ボウリング、ファットバーニング、トータルフィットネス、からだほぐしである。

#### (2) 身体運動実習

「身体運動実習」で学んだことを再確認しながら、様々な身体運動やスポーツを継続的に実施することの意義について学び、「身体運動の生活化」を図っていくことを目的とする。平成13年度の開講科目は、バレーボール、ソフトボール、バドミントン、サッカー、ソフトボール、テニス、レクリエーションスポーツ、卓球、ゴルフ、ウォークランでダイエット、ボディワークである。

#### (3) 身体運動の科学

本講義では、スポーツを含めた人間の身体運動に、生理学的、生化学的、心理学的、社会的な観点からのアプローチが試みられる。トレーニングの方法と効果、競技パフォーマンスの心理的要因、運動によるメンタルヘルスの向上、身体運動の社会・文化的意味などについて、それぞれの観点から専門的に講義される。

#### (4) 生涯スポーツ実習

身体運動の心地良さを体感しながら、生涯にわたってスポーツを実践していくための基礎的能力と態度を養成する。技能の高度化をめざすことを通して、健康づくりや生涯スポーツへの動機づけとその継続的实践を推進していくための方法を学習することになる。平成13年度の開講科目は、バドミントン、卓球、テニス、ソフトボール、サッカー、バスケットボールである。

#### (5) 生涯スポーツ実習

身体運動の心地良さ、技能が高まっていく楽しさを体感しながら、生涯にわたってスポーツを実践していくための基礎的能力と態度を養成するとともに、人々の健康づくりや生涯スポーツへの動機づけとその継続的实施を推進していくための「指導」と「マネジメント」の方法を学習する。平成13年度の開講科目は、卓球、テニス、サッカー、バスケットボールである。平成14年度は学外実習（キャンプ）を開講予定。

#### (6) 生涯スポーツ論

健康・スポーツをめぐる諸問題やそれらの解決に向けての実践的指導に関して、専門的かつ体系的な知識を深めることを目的とする。具体的には、日常生活における健康法、身体と心のコンディショニング、スポーツをめぐる社会問題、スポーツの本質等を内容とする。

#### 《附》

「九州大学学生健康・体力及び体育・スポーツへの意識と課題－新しい大学体育のあり方を求めて－」（平成4年）

ここで実施された調査を要約すれば、1) 痩せ過ぎの九大生（女子）、2) 弱々しく疲れやすい九大生、3) 体力に自信がなく、健康不安を抱く九大生、4) 不規則な生活で、精神的に疲れている九大生、5) スポーツは非常に好きだがスポーツで汗を流せない九大生、などの特徴が認められた。このような実態と浮かび上がった課題をもとに現在の健康・スポーツ科学科目のカリキュラムが構築された。

#### 「ボディワークによる「からだ」への教育

最近、引きこもりや不登校などの心理的に不健康な状態に陥っている人たちが増えつつある。心理的に不健康状態にある人は運動をしたがらないという仮説に従えば、このまま放置すれば益々からだの不健康な状態に陥ることが予測される。これまでの体育・スポーツはルールや技術に人を適合させる方法論が主流であり、運動技能に優れ、精神的にも身体的にも強い丈夫な人間を育てることが学校体育の理想とされている傾向があった。しかし、このようなアプローチは運動に不馴れな人や心理的な健康ランクが低下した人たちには必ずしも適した方法とはいえない。それらの人にとって必要なのは「できる」ことよりも「感じる」ことであり、自分のからだの外側よりもむしろ内側へ意識を向けることが重要であると考えられる。2年前より身体運動実習においては、からだを通して個人の内省へと向かわせるようなボディワークを用いた授業も開講されている。以下に、ボディワークを教材とした身体運動実習。「からだほぐし」について紹介する。

#### <目的>

ここでは、青年期におけるからだへの教育の一つの視点として、ボディワークを教材とした体育におけるからだへの気づきについて学習する。

授業では、次の四点を目的としている。

- ・ からだの緊張に気づきそれを解きほぐすことによって、無意識下にあったこころの状態に気づくこと
- ・ 自然体を目指すワークを通して心身のゆがみを除き、からだの心地よさを感じる
- ・ 身体接触を通して他者への関わり方に気づくこと
- ・ 五感や身体感覚を深く意識することを通して「いま、ここ」にある自分を再発見すること

#### <方法>

調査対象：対象は、九州大学身体運動実習。「からだほぐし」受講者 34 名（男性 8 名、女性 26 名）である。

実習内容：実習では、「ボディトーク」、「ボディ・アウェアネス」の中から教材を選択した。「ボディトーク」は心身一如の観点からこころとからだをほぐし、柔軟な人間関係を作り、自己表現や人間同士の触れ合いを大切にする技法で、その体系は発声・呼吸法を中心に、自然体法、人間関係法、自由表現法の四分野からなっている。「ボディ・アウェアネス」は、こころとからだがいっつも同時に働く存在として「からだ」をとらえ、「いま」「ここで」自分のからだに起こっていることに気づくことが大切にされる。内容は、ニュー・カウンセリング、センサーリー・アウェアネス、アレクサンダーテクニク、即興表現などをベースにしたもので、アウェアネスの下位目標として「感じる」「動く」「ひらく」「かかわる」「表す」が置かれている。

< 結 果 >

受講生の自由記述をカテゴリーに分類した。表2はカテゴリーに相当する記述内容の延べ数である。

表2. 学生の自由記述内容の分類 (延べ数)

内 容	数	内 容	数
からだ・こころへの気づき	23	五感の感受性の大切さ	13
今まで意識していなかった自分のからだへの意識	17	からだとの対話	12
人との触れ合い、コミュニケーション取り方	16	人間のからだの奥深さ、自然治癒力	12
心身一如	14	今後のからだへの気づかい	9
リラックス	13	イメージとからだ	7
からだからこころへ・こころからからだへ	13	その他	4
健康	13		

< 記述内容 >

【リラックス】

「穏やかな気分」「気持ちよかった」「暖かさを感じた」「からだ全体から力が抜けていく」など

【からだからこころへ・こころからからだへ】

「からだをほぐしているうちに気分もほぐされ楽になった」「『からだほぐし』を越えて『こころほぐし』の役割を果たした」「からだに直接意識が行ってこころが落ち着いた」「心配なことがあるときは特にからだは暖かくなり背筋が伸びるような気がした」などといった心身の相関性に関すること

【からだ・こころへの気づき】

「身体の各部位のこり・違和感」「小さな頃からクラシックバレエを習っているので体の動かし方や感じ方はよく認識しているつもりだったが気づいていない背中のこりや痛いところがあり驚いた」「からだの一つ一つを意識することでとどこおっていた水が流れていくよう」「からだの感覚を意識して感じることで自分の弱さや気持ち、考え方を分析した」「からだの感覚を素直に受け入れることで心も穏やかになり、人との交流がスムーズにできるようになる」「自分の居場所、存在の正体などが客観的に見えた気がして不思議と落ち着いた」「『緊張している自分』の存在に気づいた」など

【今まで意識していなかった自分のからだへの意識】

「今まで感じていた身体感覚は、肩が凝る、腰が痛いなどステレオタイプな症状を持つものばかりで、内的な深部へ向かう感覚を味わうことはなかった」「自分のからだなのに何か新しいものに接しているよう」「からだの信号が読めるようになった」など

【心身一如】

「からだの健康と精神の健康はつながっている」「からだとこころも二つで一つである(私という人間は一人なのだから)」「からだを用いてこころに近づくのはとても自然なことに思えるが今まで気づけなかった」「精神的に良好でないときはからだに表れるので、今の私にとってはからだに注目するやり方が一番わかりやすい」など

【今後のからだへの気づかい】

「あれからはもう少し自分のからだを気づかうようにする」「からだをほぐすことでこころに

ゆとりを持ちたい」「こころの健康のためにからだに意識を向けたい」「からだで感じたことを元に自分の行動を改めていきたい」など

#### 【からだとの対話】

「からだの声を聞こうと思うようになった」「今までは自分のからだにうそをついてきたことがたくさんあるが、これからはからだと会話できるつきあい方をしていきたい」「からだは何を求めているのか、どうしたいのかを考慮したい」など

#### 【イメージとからだ】

「暖かいものがからだを通っていくイメージ」「足の裏から何かわいてくるイメージ」「からだの一部分に意識を集中することで確かな存在感」「自分を水の入った皮袋と思うことで肩こりと腰痛が治った（注）」など

#### 【健康】

「健康は何かを犠牲にして得るものではない」「自分にとって心地よい状態が健康」「自分のからだをよく知る内面的なことが重要」「健康でいられるか、いられないかは自分の中にある」など

#### 【五感の感受性の大切さ】

「五感をじっくり使ってからだ [を・で] 感じること」「自分の感覚と対話する大切さ」「普段は目の前に見えるものだけにとらわれてきた」「空気がからだに触れてしみこむような感覚があった」など

#### 【人との触れ合い、コミュニケーション取り方】

「身体接触を通して自分の殻から抜け出せずにいたのを感じた」「人と人が触れ合うのはこんなにも暖かく安心できるものなのか」「人に触れたり触れられたりすることが苦手だったが、授業を通して触れ合うことで相手をより身近に感じられるようになった」「自分の考えを発言したり、友人と語り合ったり、自分を表現するようになった」など

#### 【人間のからだの奥深さ、自然治癒力】

「自分のからだは限られた小さな存在だが、内のイメージや意識は無限に広がることができる」「人間が持っている自分の体調を調節しようとする能力みたいなものを意識した」「意識の焦点が体内に集中し、血液をめぐる感覚や気持ちの落ち着いた感じ、自分が地球における『生命体』の一つに過ぎないことなどを認識できた」など

#### 【その他】

『「今、からだはどんな感じですか」という問いかけに答えることが恥ずかしくてできなかった」「受講学生に男子が少ない；日頃からからだを使うことにのみ執着しがちな男子の方がこの授業を受けるべき」「自分のからだあまり向き合えなかった気がする」

（注）野口三千三は「生きているからだ」を「皮膚という……生きた袋の中に、液体的なものがいっぱい入っていて、その中に骨も内臓も浮かんでいる」と表現した。授業の中で自分のからだの捉え方の一つとして、この「人間の体は水をつまんだ皮袋」という考え方を紹介している。

今回、自由記述のなかから【リラックス】【からだからこころへ・こころからからだへ】【からだ・こころへの気づき】【今まで意識していなかった自分のからだへの意識】【心身一如】【今後のからだへの気づき】【からだとの対話】【イメージとからだ】【健康】【五感の感受性の大切さ】【人との触れ合い、コミュニケーション取り方】【人間のからだの奥深さ、自然治癒力など】とい

ったカテゴリーに分けられた内容が報告された。当然のことながら同様の教材を体験してもその受け止め方には個人差があるが、多くの受講生が「これまでに体験したことの無いからだへの視点」を感じている。

受講生は、小学校・中学校・高等学校を通して12年間体育教育を受けてはいるが、主観的な「からだへの気づき」といった視点からからだをとらえる経験は皆無に等しく、日常生活においても人や自然との関わりが希薄な者が少なくない。自己の健康観を確立し、自らを健康な状態にするためには、数値でからだを知るだけでなく、からだの「感じ」により敏感になる必要があり、それが主体的に生きるからだを育てることになる。「からだの心地よさ」を感じ「からだとの対話」を体験する機会は、自分自身のからだを心と身体が統合された全人的な存在として実感させ、自己の健康を管理する上でも有用であることが考えられる。運動に不馴れな人、心理的な健康ランクが低下している人への身体運動のアプローチの可能性を探るものとしても、今後検討を重ね、よりよい体育授業の展開を図っていきたい。

#### <参考文献>

- 高橋和子, 足立美和, 原田奈名子 (1998) : 青年期におけるからだの気づきを促す為のプログラム開発. 大学体育, 24(3) : 41-50.
- 野口三千三 : 原初生命体としての人間. 三笠書房, 1989.

## 保健体育部会報告

佐賀大学助教授 久永 義裕

佐賀大学教授 江崎 利昭

平成3年の大学審議会による大綱化の答申以降、各大学における教養教育は個性化が進められている。保健体育教育は豊かな人間性を涵養する教育目的の中に位置づけられ、必修か選択かは各大学に委ねられている。名称も保健体育ではなく、健康・スポーツ科目あるいは類似の名称に変わりつつあり、本部会名も今後検討されなければならないであろう。

大綱化・個性化が進む中で、保健体育は、大学教育における教養教育の一環として、体育・スポーツ学の研究成果を取り入れ、学生の心身の改善の視点、生涯健康・生涯スポーツへと繋がる視点、身体教養としての自覚・資質の育成の視点等が大切である。必修か選択あるいは名称の変更に関係なく、大学教育の一環として、これらの視点を開発、実現するために有効な教育、授業のあり方あるいはそのための魅力的な授業づくりが、現在、求められている。大学体育教育の担当者で構成されている財団法人九州地区大学体育連合の研修会もこの方向に向かっている。

今回の本部会は、統一テーマ「改めて問う、教養教育の目的」を受けて3件の研究発表と部会討議が行われた。いずれも、前述のような各視点を達成するための効果的な授業を、いかに創り上げていくかの内容と方法についての発表であった。

佐賀大学の江崎利昭先生は「健康・スポーツ科目の学生による授業評価について」と題して、教養教育を担当する組織である全学教育センターで初めて公的に全学的に実施された、学生による授業評価の資料を基に、健康・スポーツ科目の結果を報告された。これまで、大学では研究が優先され学生の教育方法については各教員に委ねられており、教員個人の私的な授業評価をもとに改善がなされてきたのが実状である。よりよい授業の方法を求めるためには、限界はあるにしても、このような公的な授業評価を行うことの意義をまず強調された。教育においては学習者である学生の理解度を考慮した授業が行われるべきであり、その意味で学生の意識を把握することは重要であると思われる。このような学生による授業評価の実施は、授業の閉鎖性を防ぐとともに、学生の学習環境を改善し学生全体の授業理解度等の向上を図るためには重要であり、組織的なシステムとして定着させることが必要であろう。そのためには、例えば実施組織と手続きのシステム化、授業評価の結果を短時間で教員にフィードバックできること、科目に対応した設問内容の工夫等の課題があると述べられた。

長崎県立大学の西村千尋先生は「長崎県立大学における体育実技の現状と課題」と題して、県立大学の新学部構想と Semester 制の徹底あるいは他大学との単位互換制度の推進等が進行する中で、体育実技の30時間1単位を15時間1単位に変更が余技なくされたこと、それによって実技・講義融合型をとり、学生自身の身体的、心理的データを基にレポート作成等を盛り込むことにより教育効果を上げることが困難となり、新たな授業構成を再検討せざるを得なくなったこと等の状況が述べられた。他大学との整合性あるいは単位互換制度の推進を理由に設置者が、体育

実技の効果を無視して変更させることは、各大学での個性化が言われている中で憂慮すべきことではないかと思われる。

九州大学健康科学センターの高柳茂美先生は「九州大学における体育教育の位置づけと課題」と題して、先生が実施されている身体運動実習Ⅰの中の授業実践について紹介があった。身体運動実習Ⅰは、スポーツを含めた多様な身体運動が人間の「からだ」や「こころ」にどのような働きかけをするのかを体感し、運動やスポーツを通じて、健康の自己管理の意義と実際について学ぶことを目的として、選択で開講されている。その中で先生は「からだほぐし(ボディーワーク)」という実習を担当されている。従来の体育・スポーツはルールや技術を人に適合させる方法論が主流であり、運動技能に優れ、精神的にも身体的にも強い丈夫な人間を育てることが目的とされていた。しかし、このようなアプローチは運動に不馴れな人や心理的な健康ランクが低下した人たちには必ずしも適した方法とは言えない。このような人たちを対象として運動が本当に有益であるためには、体からアプローチしてその改善を図る方法を行うべきである。そのためには自分の体を知る(自分の体がどうなっているかを知る)ことが基本で、それから運動は体によい、できない体(きつい、重い等の体)を認識する、運動したくなる体にするといったプロセスを重視する方法である。同時に体の変化と無意識化にあったこころの状態にも気付かせる。まさに、身体の教養を育成させる授業実践であろう。これまでの身体を強健にする目的と合わせて、このような授業も大切なものと言えよう。

当日の部会参加者は20名程度であったが、熱心な討議が行われた。とくに印象に残ったのは、運動を行うことによって、身体的に改善されることと合わせて、精神的に問題のある学生が意欲的な生活を送れるようになった、他学生とのコミュニケーションがうまく図れるようになったという会場からの多くの発言であった。専門教育が重視され、大学の個性化が進む中で、体育・スポーツ教育が選択を余儀なくされている大学も多くなっている。学生の4年間、6年間の勉学期間の中で、体育・スポーツ教育でしかできない有益な成果があるのは事実であり、それは必修として行うべきであると考えられる。しかしながら、必修あるいは選択いずれにしても、大学教育の一環として、魅力的な授業、実りある教育内容を提供することは将来的にも追求していかなければならないことであり、今回の研修会がその一助となり、出発点となれば幸いである。

最後に、本部会は研究発表をして頂いた3名の先生方とこの部会に参加して頂いた先生方のご協力により、また当日の会場設営員と補助員の方々のお陰により盛会裏に終了できたことを衷心より感謝申し上げて、座長報告と致します。